サイノウの果てに

タナバタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
サイノウの果てに

【Ｎコード】
Ｎ８７６８Ｔ

【作者名】
タナバタ

【あらすじ】
いつもと変わらない日常、いつもの風景、いつもの友人。
特別な才能もなく、はたまた勤勉というわけでもない。
そして、何一つ不自由なく暮らせる自らの家。

そんな世界はつまらない、飽き飽きしていた主人公　臥龍　麗音。
平凡にも飽きていた主人公は新学期早々、幼馴染の椰子岡　優愛と共に遅刻寸前となってしまう。しかし、その遅刻が２人を平凡からどんどん非凡へと変えていく…。

新しいリアルＳＦ学園物語が始まる…。

case. prologue

特技

それを最初から持っている人間などそういない。
むしろ…それを最初から持っているというのなら、それは

才能

と呼ぶべきものだろう。

どちらが優秀かなんて判断などできるものだろうか。
…無理やり分けると言うのならば、この世界ではこう分けられている。

『自ら努力し、苦労しながらも諦めずに得る事が出来たダイヤの原石――それが特技』

逆に…

『最初から眠っていて、それを発見し磨きあげる事が出来た黄金の塊――それが才能』

そして、この相対性となる二つの人間の賜物が関係してくるのが

能力

なのである。

…さて、ここで選択肢を与えます。特に意味のない質問ですが…。

あなたは、特技と才能の　どちらが欲しいですか？

……答えは出ましたか？

…そうですか。あなたはそちらの方を選びましたか。

どちらが正しいか。　それは自分で見つけるものです。

特技を選んだ貴方。　今の生活が楽しいですか？

才能を選んだ貴方。　今の生活に満足していますか？

私は、生活が楽しいわけでもなければ満足もしていません。

…欲張りですか？

人間、欲に囚われて生きているものです。

そして、人生を逆戻しをしてからまた再スタートができればどれだけ良いのだろうかと

考える毎日。

…長話もなんですから、どうぞこちらへ。

温かいコーヒーでも淹れましょう。

…え？今は夏？　では、冷たいミルクティーでもいかがですか？

ははっ、またまた御冗談を。

これから話すのは、私の過去の話ですよ。

なぁに、大した話ではありません。今の時間は単なるプロローグにすぎませんから。

ただ、青春時代の馴れ初め話をしたくなっただけですよ。

…ほぅ。それでも聞くと。

仕方がありませんね。私から繰り出した話題だ。

どんなに長くなっても知りませんよ？

…そうですね。時は……

私達の高校生時代の話です。

結論から言ってしまえば、そのころは楽しかったんだ。

そして、後先考えずに突っ走る、冒険心があの頃はあった。

…えぇ。嘘を付きましたよ早速私は。

私は…　『今の生活がとても楽しい』　と感じたんです――――

ｃａｓｅ．　１　一犬影に吠ゆれば百犬声に吠ゆ

朝。

いつも通りに目覚まし時計をぶん殴り、目覚ましが悲鳴を上げたところで俺は起きる。

今日は４月８日。新学期だ。

臥竜麗音、７時丁度に起床。

幸い、高校からはさほど離れていない。自転車で２０分弱といったところか。

新２年次となる俺の高校は単位制と言って、自分の時間割を決められる珍しい高校。

その名前は『夕陽丘高等学校～ゆうひがおかこうとうがっこう』

その名の通り、夕方部活を終えて校舎の裏側を見ると、晴れた日には美しい夕陽が映える。

「ふあ～ぁ。」

一つ、大きなあくびをしたところで妹の声が部屋に響き渡る。

「レオ君！！朝だよー！！　ごっはんーごっはんー♪」

ちょっと何を言ってるのか分かりませんけどもね。
レオというのは勿論、俺の事。小さい頃に麗音を聞き取り間違え、今の形に落ち着いた。

即席のそんな歌を歌いながら階段を駆け降りる妹。
そして、俺も階段をゆっくりと降り、顔を洗う。

「おはようございます、麗音様。今日の朝食はいかがいたしますか？」

と、俺に話しかけてきたのは、執事の瀧沢さん。…まぁ、執事なんだが…俺の家はとても大きい。
親の残した家で、両親はどちらも今はいない。
母親は外国へ行って働いており、父親は音沙汰もない。どこで何をやっているのだか。

…付け足しをしておくと、俺はおぼっちゃま扱いが苦手だ。

「瀧沢、俺はそのような言い方をするなと言っただろう…。普通に上から目線で話してくれよ。」

「…失礼、根に染みついておりまして…。」

「ほぅら、まただ。タメで話してくれよ寒気がする。」

「分かったよ。じゃあ、改めて…麗音、朝ごはんは何にする？」

と、執事はイケメンボイスでそう言った。

「普通の朝飯にしてくれ。そんな胸焼けのするような朝飯はいらないからな。」

俺はだだっ広い厨房を指さしながら言う。

指先にはシェフが3人くらいいて、俺の注文を待っている状態だ。

そして俺は続ける。

「食パンに、マーガリンとヨーロピアンブレンドのコーヒー。」

「かしこまりました。」

「…やはり直らないのな。」

「…あっ。」

まぁ、端から染みついているのは分かっているが、そのような扱いをされたくないんだ。

普通が一番なんだよ。…ただし、俺の家に関してだけだ。

学校へいつもと変わらないように行ってもなんの面白みも感じられん。

俺は席がえをわくわくしながら喜ぶタイプの人間だからな。

厨房で、シェフもいらないような朝飯を準備してもらっている間に俺はケータイを見てみる。

時刻は7時。まだ早いか…。

と、そこで一件の新着メールに気がつく。

…ユアからか。

「ごめん、今日寝坊した！！」

…いや、どうしろと。

このメールの相手は幼馴染の『椰子岡　優愛～やしおか　ゆうあ』

昔っから俺の近くに居た、漫画で見るようなマジの幼馴染。

…少々天然なのが玉に瑕。いや、もっと引き立たせているのか？

一応伝えておくが、付き合ってはいない。お互いにそのような気持ちはないのだろう…。

だが、一緒に登校しているのも災いし、まぁ…その、彼女の容姿もけして悪くないので（むしろ良い）嫉妬や勘違いも多い。

1年生の頃は学校祭のミスヶ丘の2位に輝いたんだからな…。

「どれくらいに家に着きそうだ？」

しばらくして、瀧沢が珈琲を持ってきたと同時にメールが届いた。

「8時15分くらい！！」

あー、遅刻になりそうなフラグがビンビンだぜ…。

一犬影に吠ゆれば百犬声に吠ゆ…と言うように、一人が遅刻すれば

一緒に同行する俺も遅刻するってわけだ。
三蔵法師も遅刻すれば豚と猿と河童も道連れだったってことか。
「走ってこい。」
それだけ俺は用件を伝え、ゆっくり朝食をとる。
「今日は最高級のマーガリンとパリの小麦を使用した角食をご用意いたしました。」
「……普通じゃないのな。」
「普通と言われましても、その普通がこの邸にはございませんでした…。」
「いや、その言葉遣い。飯が普通じゃないのはいつもの事だろ…。」
「あ…。」
多少呆れつつも、無駄にでかいテレビでいつもの報道番組を眺める。
すると、こんなニュースが朝から独占でやっていた。
「怪奇！？深夜徘徊する謎の人々！！」
「…深夜徘徊？普通じゃねーの？」
俺は一人でそんな突っ込みをする。
「昨夜未明から、若い人々などが忽然として消えて行くという怪事

件が発生しています。
しかし、翌日の早朝には必ず元いる場所に戻っているというなんとも不可思議な事です。
徘徊していた人に話を聞くと、全員が分からない、知らないと言っています。」

「…不思議なもんだな。記憶がねーのか。」

「レオ君ー、ユア姉ちゃんまだー？」

無邪気な妹の声が響く。
ユアというのは優愛のあだ名だ。

「あぁ。寝坊したらしいから先に行っててていいぞ？」

「分かったぁ―。行ってきまーす！」

「行ってらっしゃいませ、結衣様。」

「バイバイ羊さん！」

「…結衣様、執事でございます。」

毎日のように繰り返されるコントに付き合ってる瀧沢も健気だよな…。
とか何とか思っているうちに、入れ違いにユアが駆けこんで来た。

ｃａｓｅ．　２　事実は小説よりも奇なり

「ごめん遅刻したぁぁっっ！！！」

と、額から汗水を流している爽やかな女子高生が目の前に現れた。
こいつが幼馴染の椰子岡優愛（やしおかゆうあ）

「大遅刻だ。やめてくれよな、新学期早々に遅刻なんて…。」

「お送りしましょうか？」

「あぁ。出来れば頼む。だがベンツだけはやめろ。目立ち過ぎる。」

「えー、あれフカフカで気持ち良いのに…。」

「お前は遅刻してきた身で何をぬかしてやがる…。」

「ごめんなさい。」

あっさり謝るユアも珍しい。いつもここは突っかかってくるのにな。

そして、俺らは車に乗り込み、学校へと向かった。
その時刻は８時１５分。…約２０分かかるのだが間に合うだろうか…。

「…通勤ラッシュで道が混んでますね…。
　おや、あれは咲さんでしょうか？」

瀧沢の見る方向に目をやると、全力で自転車をこぐ咲…『田所咲（たどころさき）』の

姿があった。どうやら奴も遅刻ギリギリらしい。
しかし、車ではいけない小道を走れるので、遅刻は免れる…と思う。

「おーい！咲ー！！」

「…窓も開けないで叫ぶ馬鹿どこにいるんだよ…って現にここに居るのか…。」

ただ、窓を開けて叫んだとしても声が耳まで届いたかどうかは定かではない。
いつもはおとなしい咲が鬼のような形相で自転車をこいでいるのだ。
…おそらく、寝坊でもしたんだろう。南無三…。

「…さて、ようやく、恐坂（おそれざか）が見えてきましたよ。」

学校へと続く大きな難関。恐坂（おそれざか）。
傾斜１５度とか言う、かなり厳しい坂道。
それに道幅がやたらせまいので車は通れない。なのでここで車を降りる必要がある…。

「じゃあ、ありがとうな瀧沢！」

「いえいえ、お気をつけて急いでください。」

車から降りると俺らは一直線に走り出す。
家から走りっぱなしのユアは多少バテているが仕方がない…。
あとで大好きなチョコレートでも買ってやろう。

「やっと学校が見えてきたよッ！！」

「今の時刻は…！？」
時計を見ると、時刻は８時３４分をさしていた。
「間に合わ…無い！！」
「あきらめちゃだめっ、走るよッ！」
たかが遅刻だが、始業式が１時間目というのもあり、されど遅刻。
死に物狂いで俺らは走る。
生徒玄関には疲れ切った葵が小さく見える…。

「遅刻…したくねぇっ！！！」

その時。
一瞬だけ、太陽の光が強くなった気がした。
いや…むしろ、太陽の光が反射した校庭が光った、とでも言うべきだろうか。
どちらにせよ、全力疾走している間にそのような事を考えている暇もなく、その話を思い出すのはしばらく後である。
今ならウサイン・ボルトも抜かせるんじゃないかというくらい走った俺らは上靴を持って階段を駆け上がる。
まだ予鈴は鳴っていないっっ！！
階段を駆け上がっているときは、時間が逆転して見えた。
周りの景色が逆再生されているように。

もちろん、ユアも一緒に走っているのだが、生徒や先生が後ろ向きに歩いているのだ。

「時間はっっ！！？？」

壊れるかというぐらいにドアを殴り開けた俺は壁掛け時計を見る。

…信じられないだろうが、俺の見た光景はＭｒ．マリックもびっくりするような時刻だった。

「…８時…２５分…？」

ありえない。

いや、むしろあり得る方がおかしい。

タイムマシンに乗ったわけでもないのになんで時間が過ぎてねぇんだ！？

そもそもタイムマシンが未来にも作れるものではない事を知っていて言っているのだが…。

事実は小説よりも奇なりとはまさにこのことを指して言うのか！？

「ま、間にあった…。」

「オイ、ユア。間に合ったどころの話じゃない。

…時間が…過ぎて居ない。」

「時間が過ぎて…って…」

ユアは視線を時計に移す。

「8時…25分…？」

俺と同じセリフを2回も言うと、俺に驚愕の質問を付きつけてきた。

「あの車、タイムマシンだったの！？」

…いや。

いくら金持ちでもそんなもの持ってたら世界中の学者が押し掛けるだろうよ…。

それにしても何故だ…？

「おぉ、麗音。おはよう、同じクラスだね。」

「ん？あぁ…真か。」

俺に話しかけてきたのは『音沙汰真（おとさたまこと）』

高1の時に出来た悪友。

頭はよく、物理や数学が大得意でいつもお世話になっている。

「椰子岡も一緒か？というか、なんでそんなに疲れているんだよ…。いつもこの時間帯だろ？」

「いや、遅刻すると思ってな…。ちょっと走ってきた。」

「何も走らなくてもいいじゃないかｗｗ」

笑い転げる真。

今の状況を言っても信用はしないだろうな…。

「あ。優愛に麗音。おはよー。」

「あ！清彩（さーや）！！おはよー…」

「なぁに？また君たち一緒に登校？
1年の時でもそうだったじゃん…。」

多少呆れ気味に言ったこいつは『皆藤清彩（かいとうさあや）』
同じく高1の時からの友人。　一人称は僕という、変わった奴。
学力はそこそこだが、地学や宝石、そう言ったものには物凄く詳しい。

「いいじゃん、一人じゃ心細いし…。」

「いつも一人の僕はどうするんだよ…。」

「まぁそこはアドリブで。」

「お前絶対アドリブの意味分かってないだろ。」

そんな馬鹿な会話をするいつも通りの学校。
…まぁ、さっきのは時計が狂っていたとかそんなレベルの事だろうと思った。

その後は普通に始業式をやって、ＨＲを寝て過ごして、普通に一日が終わる予定だった。

そんな予定が狂ったのはＨＲの時間だ。

「…眠い。やっぱさっき走ったせいだ。きっとそうだ。」

「いつもそう言って寝てるじゃん…。」

「って、お前、また俺の隣かよ。」

「なんか出席順がバラバラみたいで。」

「ほらそこ！話をしない！！今日は転校生を紹介するよ！」

先生に注意された。

まぁそれはいいとして、転校生だぁ？

なんだ？そのいかにも特別なキャラとして定着しそうなフラグは…。

「こんにちは。鐘鈴（かねすず）サウザと言います。以後、お見知り置きを…。」

「……。」

え。

「ハーフ？」

「えぇ。母親がロシア人なんですよ。」

俺の視線を感じたかのように受け答えをする転校生…。

「じゃあ、その臥竜（がりゅう）君の隣に座って。」

「はい。」

「えっ、ちょっ…。」

「どうしました？具合でも悪いのですか？」

「…いや。なんでも。」

俺は気を取り直してシャーペンを握る。
しかし、サウザ…とか名乗る奴のせいでどうも落ち着かない。
そのせいでペン回しをしていた俺はシャーペンをあらぬ方向に投げてしまった。

だが。

そのペンは宙を舞い、一旦浮遊したペンをサウザが捕まえた。

…あり得ない。

この地球上の重力から考えると不可能だ。

そんなヘリコプター並みに回転していたわけでもあるまいし…。

事実は小説よりも奇なりとはよく言ったものだ…。

「おい…お前…」

「…その先の事は言わずにいてください。貴方だからこそ見せたんです。
　席も一番後ろで他の生徒は見えて居ないですしね。」

「…とりあえず一つだけ。俺の質問に答えろ。」

「えぇ。分かりました。」

「…お前は…何者だ？」

サウザは黒板の方へ身体を向き直してから小さく応えた。

「……能力者（スキルプレイヤー）、とでも言うべき者です。」

「能力者（スキルプレイヤー）…だと…？」

case. 3　苦肉の策

「まぁ、詳しい話は後でにしましょうか？　電子図書館の核の中で待ってますから…。
　カウンター近くのメモ通りにすれば僕に会えますよ。」
その時、タイミングが良いと言ったらいいのか悪いと言ったらいいのか。
授業終了のチャイムが鳴る。
チャイムが鳴ったと同時にサウザは席を立ち、廊下の方へと消えて行った。
「レイ！今日は2時間で終了だよー…って、何考えてるの？」
俺のしかめた面を覗き込むユア。
「さっきの転校生、俺に変な言葉を吐き捨てて行っちまったんだ。」
「なんて？」
「電子図書館の核の中で待っている。カウンター近くのメモ通りにすれば
　僕に会える…と。」
「…電子図書館って、うちの図書室の別名だよね。
　丸い構造をしているから化学の電子と電子機器と掛け合わせて名

付けられたとか。」

「まぁいい。とりあえず行ってみるか。」

「さてと。ここか。初めて入るな…。」

「自習する時に活用しなよ。」

「うるせー。家でやったほうが落ち着くんだ。」

「で、メモは…あ、あった。」

メモ紙はカウンターのところに貼ってあった。
しっかし…他の人が破り捨てでもしたらどうするつもりだったんだよ。

「んー？…」

メモには、
『カウンターの電子ボードにここの電子図書館の謎を解いた答えを書け。
ただし、答えは単語４つ。日本語で書け。
ヒントは法則性。その法則性が答えだ。
真中は苦し紛れという事で了解してくれるかな？』
と、記してあった。

「…電子図書館の謎？聞いたことないよ…。
しかも苦し紛れって…。」

「あー、やってられっか。行くぞユア。」

俺は出口の扉を開こうとする。だが…

ガチャガチャ。

「…えっ、ちょっ、開かない？」

「…閉じ込められたって事ね…。」

「新学期早々やってくれるな。畜生め…。」

「さて、レオ君。謎を解くしかなくなったようだけどどうする？
扉を破壊して強引にでも出て行く？」

意味深な微笑を浮かべるユア。…答えは決まってんだろ？

「…手伝え。この謎解きにな。」

「そう言うと思ったよ。このツンデレさん。」

「さて。とりあえず謎と言ってもな…。法則性か…。」

「ここの図書館の構造は。ど真ん中にカウンター、で、カウンター
を囲むように円状に広が　ってるのが本棚。本棚は3周分あるよ。」

「どんな法則性があるって言うんだ？」
「んー、本の並び方とか？」
「…そんな3周分もあるってのにか。」
「あ、でもここはもう少し広くなる予定だったって聞いたことあるよ！
ただ、それには校舎も広げなきゃいけなくて結局断念したとか…。」
「広く…？じゃあ、4周、5周の可能性もあったってわけか？」
「うん。教頭が言ってた。」
いや、お前は何故教師とそんなに仲が良いんだよ。
俺なんか提出物出さないから評価悪いぞ…。
「円状の特性上、2周目よりも3周目の方がたくさん本が入るんだな…。」
「…待って。電子…？」
「そうか！電子だ！ここは化学の電子と同じ構造になっているんだ！！」
「でも、単語四つって…？」
「多分、置いている本の種類じゃねーかな…。確かめてみるか。

…どうやら、…論理的思考だの、哲学だのが書かれている本ばかりだ。」

俺は本の種類を見ずに、上に貼ってある種類札を見て応えた。

「えっと、２周目が…化学、生物、…理科系統だね。」

「３周目が、小説が沢山あるな…。あー…何が何だか分かんねーぞお！？」

頭をぐしゃぐしゃに掻く俺。

分からない事があるといつもこうやってしまう。

自分で言うのもアレだが、数少ない自覚している癖だ。

「論理…化学…小説…ピタリ一致するよう法則性はないね。」

「…何かに置き換えるのか？これを…。」

「英語に置き換えるのは…？」

「英語だと？えっと…論理は…Ｌｏｇｉｃで、化学はＣｈｅｍｉｓｔｒｙ、小説は…Ｎｏｖｅｌ…」

「法則性なんて無いけど…。」

「まてよ、理科系統は昔は魔術とかも言われていたから…Ｍａｇｉｃか？

そして小説は文学とも言え、郷愁とも言う…。Ｎｏｓｔａｌｇｉｃ…？」

「あっ！！最後が全部『ｇｉｃ』で終わるよ！！」

「Ｌｏｇｉｃ、Ｍａｇｉｃ、Ｎｏｓｔａｌｇｉｃ…。これじゃあ四つだな…。他にも法則性はないのか？」

「うーん…。ろじっく、まじっく、のすたる……」

「「あ！！」」

俺たちは二人揃って同じタイミングで同じ言葉を吐いた。

「Ｋ殻、Ｌ殻、Ｍ殻、Ｎ殻だ！！」

「真中はカウンターで…って、スペルはＣｏｕｎｔｅｒじゃない？」

「…無理やりローマ字読みにでもしたんだろうよ…。最初に苦し紛れって書いてあったしな。

苦肉の策ってことだ。」

そう俺は言いながら電子ボードに向かって、単語を書き連ねる。

カウンター・倫理・魔法・郷愁

カチッ

ウィィィィィ……

ガチャンッ

「おっ」

「何かが開いた音がしたね…。」

と、ユアが言った次の瞬間、俺たちはすごい勢いで床ごと真下に落ちて行く感覚を覚えた。

ｃａｓｅ．　４　奇々怪々

「うおおおお！！？？」

「な、何これ！！？？」

俺らが戸惑っている間に、超高速エレベーターは目的地まで着いたようだった。

しかし。

本来ならば電気などの人工的な光が俺らを照らすはずなのにも関わらず俺達の真上には…

憎たらしいほど燦々と輝くお天道様があった。

しかも、視線の先には校舎が見える。…どうなっているんだ…？

「…いやちょっと待て…俺らはエレベーターで下に降りた…はずだよな？」

「…うん。これが幻覚じゃなければ…ね。」

「おかしいだろ…エレベータの様なもので俺らは下に落ちたんだぜ…？」

俺は走馬灯のように今までの事を思い出してみたが、うむ。やはり

学校の外へは出ていない。ここは学校のグラウンドから通って行ける宿舎だ。

「幻覚じゃないさ。列記とした現実だ。」

と、ここで何者かが声を発した。

…男であることは間違いないが、どう考えても大人びてはいない。しかし、どこか俺らの世代とはかけ離れている…とでも言った方が良いのだろうか。

「…誰だ。」

緊迫のある声で俺はそう言った。

決してそう言おうとしたのではなく、喉に付いてる筋肉がそう動いたのだ。

「姿も現さずに自己紹介するのは気が引ける。出て行こうじゃないか、サウザ。」

「そうですね。ここへ来れたのも第一段階のテストを突破したわけですし。」

そう二人が応えると、宿舎の扉が開き、二人の人間が姿を現した。一人はあのハーフの転校生で、もう一人は制服のネクタイの色が違うので一学年上のようだ。

「テスト…だと？」

「えぇ。あの僕の言葉だけでここまで来れたんです。行動力は８０点。」

１００じゃないのは何故だ。と、突っ込みたかったがそれよりももう一人の方が気になって仕方がなかった。
それはユアも同じだったようで、俺よりも先に質問を投げかけた。

「…あなたは…？」

「…おいおい、そっちが名乗る前にか？」

呆れたように言う上級生。少しだけ、腹が立ったので俺が次に口を開いた。

「あんたがここに連れてきたんだ。優先度はそっちの方が上だろう。」

「はっ。これは失礼。俺の名前は水無月　龍星‐みなづき　りゅうせい‐だ。
ここへお前らを呼んだのにはちょっとわけがあってな…。」

「見ず知らずの2年次2人を拉致ってか？」

「おいおい、拉致とは酷い言い方じゃないか？好き好んで来たのはお前らだろう。」

…言われてみればそうであるのは間違いなかったために、俺ら二人は返す言葉が見当たらなかった。

「なんなら今すぐにでもとんぼ返りしたっていいんだぜ？」

「それは遠慮しとく。上級生だろうが大人だろうが関係はないな。」

「ほぉ。良い意気込みだ。では、第2試験を開始するか…。」
と、水無月と名乗る輩はポケットから何やらリモートコントローラーの様なものを取り出した。
そして…
ピッ
ボタンを押した瞬間に、地面が揺れた。
震度5はあろうかと思えるくらいの突然の揺れに俺は前に倒れ、ユアは芝生の上に座り込む。
それに追い打ちをかけるかのように上からアクリル板のような巨大な壁が迫ってくる。
そして、ユアと俺ら3人を隔てる透明なベルリンの壁が完成してしまった。
「おい!!これはどういうことだ!?」
「まぁ、落ちつけよ。これは『能力』を見極めるテストだ。」
「能力…だと?」
「さっきの教室での出来事。覚えてますか?」
「教室で何て…お前が転校してきた事くらいしか…」
と、その時に一つのカギが俺の頭の中を横切った。

「能力者…と、お前は言ったな…。そして、シャーペンを浮かばせたのもお前…？」

「えぇ。僕は能力者です。能力の名前は『物質移動～ポルターガイスト』ですよ。」

「ポルター…ガイストだと？」

「えぇ。まぁ、幽霊のようにモノを動かせる能力なのでそう呼ばれてるだけですが。」

「じゃぁ…ユアの能力は何なんだよ！？」

「…今から分かるさ。おいそこの少女！！まだお前の自己紹介は済んでないぞ！！」

「…椰子岡……優愛。」

「優愛か。良い名だ。椰子岡！！絶対に命の保証はしてやる。しかし、今からとんでもなく危険な事が起こる。それに対処できるか！？」

と、意味不明な発言をしており…

と、ニュースならば続くであろう言葉を水無月は口走る。

「…そんなの、やってみなきゃわからないんじゃなくて！？」

「お前馬鹿だろ！！！」

咄嗟にツッコんでしまった。
いや、反射神経がマジで反応したように。

「御尤も。じゃあ…始めましょう。」

サウザは腕を前に突き出したかとおもうと、手をグーからパーの形に大きく開いた。
その瞬間に、クリアタイプのベルリンの壁の向こうの岩、木々がユアの方へと磁石に吸い寄せられるように飛んでいく！！

直感で俺は危ないと感じたが、俺の体はそう簡単には動いてはくれなかった。
1年次の頃に、運動部へ入っていれば…とは思ったがそれは既に遅かった。

ｃａｓｅ．　５　１００の努力と１００の才能

「あぶねぇぇぇ！！！！」

必死に俺はユアの方へ駆けだす。
だが、水無月はその俺をがっしりとつかみこういった。

「……大丈夫だ。見て居ろ。」

「何言ってやが…る…？」

ガキンガキン！！

ユアが頭を抱えて床に伏せているが、周りに何か透明な壁があるような感じで全ての浮遊物体を跳ね返す。

「なんだ…？あれは…」

俺は驚きの表情を隠しきれない。

「あれは、防御～ガードだ。能力の一種だよ。
スキルレベルは…３と言ったところか。」

「防御…。じゃあ、お前が使った能力は一体！？」

「ですから、物質移動～ポルターガイストです。あんなふうに派手に使うこともできるんですよ。」

「じゃあ…俺だけなのか？能力者ではないのは…。」
そう俺が言うと、キョトンとした顔で水無月は言った。
「おいおい、まだ自分の能力に気が付いていないのか？」
「…何の事だ？」
本当に思い当たる節がないか自分の無い頭を捻ってみた。
すると、たった一つだけ。思い当たる節があった。
「…まさか、今日の遅刻か？」
「御名答。まぁ遅刻はしてないがな。」
「…それが、俺の能力なのか？機械破壊とかそんなものなんだろう？
どうせあの時計が狂ってただけだろ。俺の家の時計が。」
思いつきで即席のでたらめな能力を言ってみた。
「…そんな能力もこの世界の誰かは持ってるんだろうけどな。
お前の能力はもっと別だ。」
「…創造～クリエイト～ですよ。レベルは…そうですね。４あたりでしょうか。」
「クリエイト…？」
「お前の家の時計が狂っていたわけじゃないさ。学校の時計もお前

の家の時計も正確な時間をさしていた。
　狂っていたのは、そう。『時間』だ。お前の遅刻したくないという思いが時間を逆戻しにしたんだ。」

ウィィィィィィィィィィ……

と、透明なベルリンの壁が地面に収納される。
それと同時にユアは俺のところに走ってきた。

「…怖かった。」

少し不満げに拗ねるユアの顔を俺は久しぶりに見た。
不覚にもその顔を見た俺は顔を赤らめてしまう。

「さて。もっと深くまで能力の説明をしなくてはならないのだが、時間がない。
　とりあえずこれでも急ぎ目でやっていたのだが…サウザ、様子は？」

「…若干予定よりもおしてる。少し急いで！
　すぐに彼らに説明しなくては…。」

「…そうか。じゃあ…まずは俺の能力からだ。
　一つ質問に答えてくれ。お前たちがこの世界に適しているかどうかの適性判断だ。」

「…さっきのではまだ判断できてないのかよ？」

「…いいよ。麗音。やってやろうじゃない。」

威勢良くユアが言う。

「お前が乗り気なら俺もやるしかねぇよな…。いいぜ。水無月。」

「良い返事だ。さて。最初で最後の質問だ。よーく聞けよ。一度しか言わない。」

『お前達は特技と才能のどちらが欲しい？』

予想外の質問だった。

というか、そんな質問が来るとは微塵も思っていなかった。

最初で最後

特技と才能

正反対のモノだ。

特技は練習して『努力』して得られるモノ。

『才能』は元々生まれつき持っているモノ。

どちらが欲しい…か。

まぁ既に答えは決まっていたけどな。

恐らくユアも同じことを想っているのだろう。

「…答えが出たようだな。俺も能力を使う準備をしておこう。
…言ってみろ。その答えを。正解はただ一つ。お前らに託された。
」

『特技と才能、欲しいのはどっちか。』

「俺は…」
「私は…」

『努力をする才能が欲しい！！』

二人の気持ちと答えが一つになった。

case. 6　群雄割拠

その言葉を言った瞬間に水無月は口を大きく開けて唖然としていた。
そして同じくサウザもびっくりしていた。

「……欲張りに聞こえたか？」

「…でも、答えは一つだよね？」

「いや…欲張りではないぜ。まさかまさかの大正解だ。
その答えが出せるとは思ってはいなかったが少しだけお前らに賭けてみたくなったんだ。」

「この世界をね…。」

「…世界…だと？お前、何をするつもり…。」

「実はだな、時間を気にしていたのはタイムパラドックスが起きないようにするためだったんだ。
向こうの世界の君たちと同時に行動をしなければならないからね。」

「タイム…パラドックス…」

「あぁ。同時に同じ世界に同じ人物がいたらどちらかが消えてしまう…って奴だ。
タイミングを見計らってお前らの世界にこの世界のお前らを送ったのさ。」

「君たちはもう一つの世界からあの電子エレベーターを使ってこっちの世界に来たんだ。
電子の中には核がある…って化学で習っただろ？その核には莫大なエネルギーが詰まっている。
それを利用した乗り物なんだ。」

「ということは、この世界にも私達は存在したって事？」

「御名答。まぁ、性格やら望んでいるものやらは全然違ったけどな。」

「あっちの世界に居た君たち…つまりは今の君たち、は『特殊を好み、平凡を嫌った。』
こっちの世界に居て、今向こうの世界に居る君たちは『平凡を好み、特殊を嫌った。』
この世界の法律や常識にうんざりしてたんだよ。こっちの世界の君たちは。」

「…推測で悪いんだが、やはり、この能力という物の事で…？」

「またまた御明察。そっちの世界は能力が無いことが当たり前の世界。まぁ、マジシャンとか動物と話せるとかそういった人たちは
数少ない能力者だったはずなんだろうけどな。」

「一方こっちは全員が全員、能力を持っている世界なんだ。ただし

…今はその事で世界中で揉め事になっているんだ。
所謂…『第3次能力世界大戦』と呼ばれる戦争の真っ最中なんだ。通称は『能力戦争』と呼ばれているよ。
争いを起こすのは皆能力者だし、勢力争いみたいなものだよ。」

「…群雄割拠…とでも表現したらいいのか。学校同士での争いも多々あるからな。」

「戦争…なんか…怖いよ。殺し合いみたいで。」

ユアが恐れを顔に表す。
レオンに至っては口がポカンと開いている。

「待て待て。そんなに怖がる事じゃあない。今の日本が平和主義なのは元の世界と変わらないさ。
ただ、この学校が少し特殊なだけだ。」

「学校が…？」

「あぁ。体育、音楽等の芸術や運動科目はお前たちの世界となんら変わりはない。少々体育のスポーツが違う程度か。
ただ、習う教科が全て変わっている。単位制だからこの中から好きな教科を選べ。そうやって情報を変えとくからよ。」

「…能力化学・能力力学・能力動物学…能力というものが中心なのは間違いないようだな…。」

「おいおい、嘘をついてもしようがないだろう。
ただし、一つだけ頼みごと…いや、もう課せられている課題なんだが。」

「課題？」

ユアが訊き返す。

「実は、この学校ではその能力戦争を行うための人間を育てているんだ。

勿論、順位付けでな。それのトップ５に入って貰いたい。それなりの報酬は用意されてる。」

「…戦争を行うための人間って…それは自衛隊の様なものじゃないか！」

レオンが声を張り上げて言う。

「違うよ。君たちの居た世界ではそうかもしれない。でも、この世界では違う。

戦争とはいっても国民全員が闘うことになる。殺し合いとかそういったものではない事を理解してくれないか。」

「殺し合いじゃない戦争…冷戦みたいなもの？」

ユアの言葉に少し考えてから龍星が言う。

「まぁ、そうかもしれない。お互いの能力で『努力をする者』と『才能を持つ者』の能力を奪い合うんだ。

世界中でそれが行われていて、人間の進化の果てを手に入れるってのが目標らしい。」

「…ちょっと待て。人間の進化の果て？人間よりも優れた生き物が

いると言うのか？」

「お前たちの世界とは違うと、何回でも言おう。そろそろ受け入れてくれ。」

呆れた口調で龍星が言う。
そしてすぐに口を開いた。

「さっきも見ただろう？『能力動物学』ってのを。何も能力を持つのは人間だけじゃない。動物もだ。
　この戦争の参加者は人間だけじゃあないんだ。」

「君たちの世界では『妖怪』とか『怪異』って呼ばれてるのかな？
　不思議な能力を持つ動物。どこからかこの世界からそっちに迷い込んでいった動物達が妖怪って呼ばれているんだ。」

「…何やら難しい話だな…。」

「じゃあ、道を歩いてる最中に妖怪に襲われるってこともあるの？」

「日常茶飯事だ。気を付けろよ？能力を奪われるから。」

その言葉を聞き、一気に血の気が失せた二人。

「まー、幸いこの学校は才能を持つ傾向が強い者の集まりだ。努力次第でトップには成れる。
　お隣の星城能力学校は努力をする者の集まりで、五十歩百歩だったがな。」

「…ま。面白そうじゃねーか。」

「そうだね。やってみる価値はありそうだね。」

「おっ。乗り気になってきたか？」

龍星が笑顔で二人に言う。

同じくサウザも笑顔だ。

「能力戦争、勝ってやるよ！！」

case. 7 Nothing venture, nothing gain

日付が変わって４月１７日。
翌日の朝。

昨日は色々と変な目に巻き込まれたのだが、それはやはり自分の望んだことだったので
いきなりとは言えど多少は満足していたレオンとユア。

自分の家に帰ってみるとやはり家族にも能力が備わっていて、色々な生活が便利になっていた。

テレビでニュースを見ても、超能力や霊現象のことは一つもやっておらず…というのは語弊がある。

逆だった。まるっきり逆で、ニュースなどでは能力を持った生き物に人間が襲われるなどと言った
話しをやっていたり、能力戦争の特集をやっていたりしていた。
外国では大規模な能力戦争についてのデモなどが起きていたりする。

全人類が生まれつき能力を持っているわけではないということも分かった。
龍星が言っていた『能力が当たり前』という事はあながち間違いではないが、
その能力のせいで人に差別や力の差があることに間違いはなかったようだ。

「…この世界の俺も、自分の能力が弱いせいで能力を持たない事を望んだのか…？」

執事が淹れてくれるコーヒーを飲みながらそんな事を呟いていた。

「しかしなぁ。この世界の俺の能力は何だったんだ？」

と、疑問を持った。昔から疑問を持つと解決しなくてはならない性質だったので執事に聞いてみた。

「なぁ瀧沢。俺の能力って…特別なのか？」

この質問をすれば、この世界に居た俺の能力と今の俺の能力の差が分かると踏んだ。

「えぇ。特別ですよ。麗音様の能力は『創造』、『殊』能力の類です。」

「だから敬語はやめろって。」

「…あ、あぁ…そうだったな。」

と、言い直す執事を横目に流しながらマーマレードを控えめに塗ったパンに齧り付く。

…思わず口走ってしまったがこの世界でも俺は執事の敬語は嫌らしい。対して性格自体は変わらないのか？

しかし、また疑問が浮かんだ。今の答えからすると、俺の能力は前の世界の俺の能力と変わらないらしい。

何故、龍星やサウザは俺とユアの能力を試したんだ？　そして、『殊能力』とは何か…。これはサウザに学校で聞くか。

「…俺の能力は生まれつき持っていたモノだよな？」

「そうだ。ただ、能力の開花は才能の開花と共に訪れる。小学校の頃に特技を会得した時だ。周りの人間よりは早かったかな…。」

「…特技を会得すると能力は開花するのか？」

「あ、あぁ。そうだが、最初から能力を持っている物も少なからずいる。そうした者の能力は非常に強い勢力だが法律で使用を制限されている。

…しかし、今日はどうしたんだ？まるで記憶喪失でもしたかのように疑問を投げかけてくるな。」

「いや、一度頭の整理をしたかっただけだ。」

「そうか？それならいいが、病院へ行く時は教えなさい。」

病院って…精神外科か？脳外科か？

それはさておき…。

俺の特技は『剣道』だ。小学校のころからやっており、『平成の沖田総司』とまで称された程。…なんか自分で言ってて気恥ずかしいな。

ついでに言っておかなければならないのはユアの事。

ユアの特技は『恐ろしいほどの推理力』。周りからは別嬪さんと言われ、称されたあだ名は『平成のコーデリア・グレイ』。

近所では若い女探偵とかコーデリアさんとか言われている。

「レーオーンー！迎えに来たよー！」

「あぁ分かった。今行くよ、シャーロキアンさん。」
ユアがいつも通り迎えに来た。…方向音痴のユアが来れたって事は本当に能力以外は何も変わらないんだな。この世界は。
「気を付けてな。何かあったらすぐに電話しなさい。」
「大丈夫だ。車に轢かれるとかそんな小学生じゃあるまいし…。」
「車？」
「え？」
…おいおい、この世界には車が無いのかよ…？
「車って、空を飛ぶものだろ。」
「はぁ！？空で空中事故が起きたりしねーのかよ！？」
びっくりだ！！爆笑モノだ！！ハリー〇ッターだよそんな世界！！
「まぁ、たまにあるがそれは法律でルールが決まってるから大丈夫だろ？」
…ＯＫ、この世界では常識は通用しないらしいから発言は控えよう。喋ったら残念とか言われる俺にはもってこいの世界だ…ｏｒｚ。
「私が気を付けろと言ったのは怪異の事だ。最近、ここらへんにも増えてきたらしいからな。」

「分かった。行ってくるよ。」

「あぁ、行ってらっしゃい。」

…朝から疲れるぜまったく…。

ドアを開け、無駄にでかい大豪邸から出ると、そこには見たこともない…いや、正確には映画でしか見た事が無い光景が広がっていた。

…なんだあれは。ミサイルの様な形をした奇怪な乗り物に人がまたがっていて空を飛んでいる。

その上、タイヤが無く、流線形の乗り物に人が入って通勤や通学に使っているらしい。

空にバス停の様なものがあるんだ…？あそこまでどうやっていくんだよ…。

一応、バス停で待っている人は何かに乗って浮いているが…。

道路は何も乗り物が走っていなくて、大きな道路は人で一杯だった。警戒をしていないのか、動物たちが平気で道路をうろつく始末だ。

「…未開の土地に来た気分だよ…。」

ユアも呆れていた。

「…乗物の乗り方しらねーし、歩いて行くしかないな…。Ｎｏｔｈｉｎｇ ｖｅｎｔｕｒｅ，ｎｏｔｈｉｎｇ ｇａｉｎ．ってことかよ…。」

「おぉ、英語の勉強したんだー。虎穴に入らずんば虎児を得ず…っ

て諺だったよね。
何事もやってみなけりゃ何も得られないってことだね！」
こうして、まだ慣れない未知の世界の第一歩を踏み出した二人だった。

case. 7 Nothing venture, nothing gain

※コーデリア・グレイ　～：P・D・ジェイムズによって書かれた小説に登場する架空の女名探偵。美人で優雅だったらしい。

※シャーロキアン　～：シャーロック・ホームズ好きの人の事を指す。

ｃａｓｅ．　８　猫の手も借りたい

２人が学校に着き、クラスに到着するといつもの仲間たちが居た。
１５人の小クラスは変わってはいなかった。

「おー、お二人さん、また夫婦登校ですかい？」

「黙れ真…。」

と、レオンに話しかけてきたのは『音沙汰　真～おとさた　まこと』
冒頭でも紹介した、俺の悪友だ。

「いいや、真の言う通り…。仲良いね。羨ましい限りだよ。」

「もー、清彩まで！！」

こちらも冒頭で紹介した『皆藤　清彩～かいとう　さあや』
僕っ娘でユアの大親友だ。

「ってか、いっつもあれに二人乗りはきついでしょ…。どういうバランス感覚持ってんだよお前らは。」

「あ？自転車の二人乗りくらい余裕だろ。お前、骨弱いなぁｗｗ」

「え？　『じてんしゃ』？　何それ。」

しまった…と、レオンは思った。ここの世界は何もかもが違う世界だったと。
よくよく考えてみれば道を歩いてるときには誰一人として自転車というものにまたがってはいなかった。

「俺が言ってるのは『エアーボード』だよ。俺が使用してるのは違うけど。」

「エアーボード…？」
「あ、あぁこいつは今ちょっと頭が弱いから…ま、また後でな！」

「ちょっ、ちょっとレオン！！」

俺はユアの腕を引っ張って階段の踊り場へと連れて行く。

「ユア、この世界は俺らの居た世界と違うんだ。ちょっとだけ考えてから発言しようぜ？」

「うー。分かった。でもさ、頭が弱いってのはちょっと失礼じゃない？」

少しだけプリプリしながら言うユア。こいつは少し、プライドが高いのだ。
だから、毎回俺の方が下に出る。

「あぁ、悪い。さっきのは連れだすためのアレだ。口うつしだ。」

「口うつしって…ちょっ…何言いだすのよ！！／／」

ちょっと顔を赤らめるユア。何考えてやがるんだこいつは。

「素で間違えた。猿回しだごめん。」

「……足して二で割って。」

「猿移し？」

「口回し！！！」

「じゃ、教室戻るか。」

「うん。あれ、何の話してたんだっけ…。」

「あ？俺がただ話したいって言っただけだ。」

「そう？なら良いけど…」

と、まぁこのようにはぶらかすと大抵喋っていた事は忘れてしまうらしい。三歩の間覚えてる鳥より酷いぜ全く…。

良い具合にはぶらかす事が出来た俺はまたユアを教室へ連れて行く。

すると、そこでＳＨＲ開始の予鈴が鳴った。

俺たちは席へ着き、先生が来るのを合図に起立、礼、と判を押したようにする。

「えーっと、今日はまず最初にＬＨＲから始まります！内容は…まぁ、後程って事で☆

その後の体育では『バドルード』の練習が入るらしいので、それ

も次の時間、決定します。」

「…若いよなぁ聖子先生。一文の後に星マーク付いてるぜあれ。」

「…真、悪い事はいわねぇからやめとけ。」

「バ、バカ、狙ってなんかいねーよ！！」

「では、ショート終了！解散っ」

その合図とともに一同は席を立ち、思い思いの場所へ行く。

「ところでサウザ、バドルードってなんだ。俺の聞き違いか。」

「いや、合ってるよ。バドルードってのは国際的に最も有名なスポーツで、オリンピック競技にもなってるんだ。

皆が専用の自分の乗り物に乗って、ボールを相手の陣地のゴールに打ち込むゲーム。まぁ、体育になったら分かるよ！」

「それもそうだな。」

そんな他愛も無い会話をクラスメートとしていると、ＬＨＲの時間になった。

『ＬＨＲ』

「えーっと、先は言わなかったけども、今日から皆さんが２年次という事で、『能力戦争』の組み分けを決めたいと思います★

１年次に能力戦争の事はほとんど習ったと思うけど、そこで習った事を生かし、『５人一組のチーム』を決めて！！
能力の種類や部類なども考慮に入れないと、学期末能力戦争試験に勝てないわよ！じゃー、開始！！」

「５人一組って…男女関係無しっすか！？」

「えぇ。関係は無いわ。男の子より優れてる能力を持つ子だったいるし、だからといって強いってわけじゃない。
みんなで協力して一つのことを成し遂げるのが、能力戦争よ。」

御尤もな綺麗事を言う先生。まぁ、真面目な顔で言ってるが…。

「サウザ、どうする？皆で話し合うのか？」

「…慣れていない椰子岡さんと君を別々にするのはまずいと思うから…僕と行動しよう。」

「分かった！」

二つ返事で俺らは了解した。あとは二人だな…。

「僕の能力は『物質移動』で、遠距離攻撃が得意な『攻能力』だ。椰子岡さんは『護』で、同じく『攻能力』。
攻撃や守りを主にする能力の事を一般に『攻能力』と呼んでるんだ。だから、一チームに二人居れば攻撃と守りは大丈夫。

問題が、残りの能力。『変能力』は、物質そのものや、性質を変えてしまう能力の事。沢山居ても戦争がややこしいだけで
勝負がつかない事もある。これもチームに二人いれば十分なんだ

けど、もう一つの『殊能力』はその能力者自体が少ない。
チームに一人いればそれはもう大きな力になる事は間違いないんだけど、いるかどうか…。」

「…俺がそうだろ。サウザ。」

「え？創造って殊能力！？」

なんだこいつは。能力の事を全て知ってるわけじゃないのか。

「…当たり前じゃないか。僕だってこの学校の一人の生徒なんだ。」

「まぁいい。後は『変能力』を持つ人をチームに惹き入れればいいんだな。」

「真はどうだ？あいつの能力がどんなのかしらねーが…。」

「呼んだか？レオン。悪いが俺はチームが決まってしまった…。
局長のチームに無理矢理だ。」

「局長？またあいつか。」

局長宅～きょくなが　たく。俺と真の中学時代の悪友。３人でつるみ、ちょっとばかし色々な事をしたもんだ…。
ガンダムとかギャルゲーとかそう言ったものが沢山家にある正真正銘のオタク。言わずもがな、知識も凄い。

「よぉレオン！悪いが真は俺のとこに入れたぜ！『数学～マスマティカ』って奴を持ってるし便利だろ？お前も来るか？」

「いや、よしとくぜ。新しいことに俺は興味があるからな。」
「とか言って…。椰子岡さんだけは変わらねーくせによ。」
「うっせー。新しいもの好きでも好意は変わらねーんだ…ってテメー何言わせてやがる！！！」
「ｗｗｗｗほーら、バカ正直なお前はそれでいいんだよ。戦争では負けねーからな！」
ま、悪友とは言ったものの心は綺麗だけどな。
しかし、チーム決めは振り出しに戻っちまったな…。
「あ、清彩、チーム決まった？」
ユアは皆藤に話しかけていた。
「いや、まだ決まってないよ。僕と組んでくれるかい？」
「勿論！いいよね？サウザ君とレオン！」
「うん。大歓迎だよ。よろしくね、皆藤さん！」
「改めてよろしくな、皆藤。」
「よろしく！僕の能力は『生物～バイオ』で『変能力』だよ。生物の力を借りて自分や仲間の体を強化するんだ。」
「っつーことはあれか。走るときはチーターの能力を借りれたりす

るのか？」

「まぁ、そう言うことなんだけど、最後に見た実際の動物からしか能力を借りれないんだ。写真でも良いんだけど能力は半減するんだ。猫の手も借りたいって時にしか写真は使わないよ。」

「猫の手ねぇ…。どっちにしろ、後は一人だ。…ん？あそこで何やってんだ？咲。」

俺の視線の先には『田所咲～たどころ　さき』がいた。中学からの腐れ縁同級生。割とおとなしめの女子だ。
具合でも悪いのか、机に突っ伏している。

「おい、咲、大丈夫か？」

「…だ、大丈夫…じゃな…。うぅ…」

…何か様子がおかしい。目のあたりに『真っ赤な隈』が出来ている。
…炎症でも起してるのか？

「おい、保健室行くぞ。おぶってやるから掴まれ。」

と、俺が手を差し伸べたところでユアが俺に言う。

「レオン、他はチームが決まったみたい。咲ちゃん連れてきて！…って、咲ちゃん、大丈夫？背中から『翼』が…」

「あぁ。だから今保健室に…って、『翼』…？」

気付いた時にはもう遅かった。その大きな翼が羽ばたき、風圧で俺

らは吹っ飛んだ。
そして、咲の体が羽毛に包まれて隠れてしまった。その羽毛からは巨大な鶴の頭が出ていた。
鶴の顔には真っ赤な隈取りが施されており、まるで歌舞伎役者のような顔だった。

case. 9　隠すより現る

「ま、まずい！！　怪異に乗っ取られてる！！」

サウザがそう叫んだ。そして、すぐに能力を使った。

「くっ！！」

物質移動（ポルターガイスト）で机を飛ばし、ツルに攻撃をするも羽ばたきで飛ばされ、全く効いているようには見えない。

「ダメだ！僕の能力じゃ相性が悪すぎる！！」

鶴が踊るように羽ばたくと机や椅子が吹っ飛んでくる。それをユアが護（ガード）する。

「…これで、良いんだよね…？でも長くは持ちそうにないよ…っ」

「椰子岡さん、もう少しだけ耐えてください！！　先生！！聞こえますか！！」

と、先生を呼ぶも、机が脳天にクリティカルヒットしてしまったようで気を失っている。

「ダメだ、気を失っている。　鐘鈴！俺がモノを出すから能力で飛ばしてくれ！！！」

「分かったよ局長！！君の能力は！？」

「『召喚(サモン)』だ！！　剣よ、出でよ！」

局長が能力を使うと、何もなかった空間に剣が現れ…れば良かったのだが、なぜか鉄の塊が現れた。

「…あー…失敗したなー…。」

「こんなときに何やってんだよテメー！！」

「いえ、なんでも良いです！！椰子岡さん！能力を解いて！！」

「分かった！！」

ユアが能力を解くと、また突風が俺らを襲った。
しかし、それと同時にサウザも能力を使い、鉄の塊は風を無視し、巨大な鳥に突っ込んで行った。

「行っっけぇぇぇぇぇ！！」

ドォン…

と、鳥の胸に当たり歌舞伎役者顔の鶴は堕天した。

「…なんとか一大事を免れたみたいだね。」

「（俺何にもしてねー！！一応主人公だぜ主人公！！立場的な意味でヤバいって！！）」

レオンはそう思った。

「サウザ君、こいつは？」

「…分かりません。怪異の一種としか…」

「こいつは『歌舞伎鳥（かぶきどり）』だよユア、鐘鈴。」

と、生物～バイオの能力を持つ皆藤が言い、そして続けた。

「歌舞伎役者のように物や人の『演技』をして、変身したかのように人を騙す。

勿論、遠目からはその変身した物にしか見えないんだけど、顔のあたりを見れば真っ赤な隈があるから分かりやすいんだ。

で、その解除方法は…えい。」

皆藤は指先から水鉄砲を出し、鶴の顔を洗った。

すると、隈が洗い流されて羽毛が消え、一匹の小さな鳥と田所が横たわった。

「水で隈を洗い流すと変身が解けるんだ。だから水の生き物や噴水とかには擬態できないみたいだよ。

完璧に隠れる事は出来ないから、実際は飛んでた方がばれにくいんだけどね…。」

「まさに、隠すより現るってわけか…。」

レオンはお得意の諺を披露しながら感心していた。

「うお！？マジックか！？その水鉄砲！！」

と、局長が驚いた顔で言う。

「バカ。さっきの突風で飛んできた生物資料集の『テッポウウオ』の写真が目に飛び込んできたから僕がその能力をコピーしたんだ。」

「便利だな…その能力。」

「ところで咲ちゃんは！？」

「しまったっ、田所！大丈夫か！？」

「…うー…ん…。あれ、私、なんで倒れてるんだろ…。」

「気を失ったんですか？」

「うん…。あー、君は確か、転校生君？」

「いや、名前はちゃんとあるんだけど…」

「私に鉄の塊当てた人だー。」

「！？」

…咲はどうやら歌舞伎鳥の時の記憶も持ち合わせているらしい。

「え？なんでそれを？」

「…いや、なんかね、目が覚めたらいつの間にか浮いててね、バッサバッサやってるの。私が。

で、ユアが能力で皆を包むバリア張ってて。自由は利かなかったんだけど、みんなが私と闘ってるのは分かったんだ。ごめんね…。」

うつむいて涙目になる咲。

「大丈夫大丈夫！能力戦争はこんなもんじゃないからさ！」

「歌舞伎鳥は人間に取り憑く時、その人間の意識を保ったまま操るから性質が悪いんだよ…。」

「とりあえず、先生と咲を保健室に連れて行こう。サウザ、咲をおぶって！俺は先生を運ぶ！」

「わ、私はおぶられなくても大丈夫だよ！！」

「そうか？じゃあ、せめてサウザに掴まって行け。万が一だ。」

レオンはそう言って先生を担ぐ。咲もサウザの腕につかまる。

「レオン、こっちは任せておいて！」

「あぁ、頼んだぜ。ユア委員長。」

言い忘れていたが、一応このクラスの委員長はユアだ。ちゃんとやってくれるはずだろう。

「うわっ、聖子先生どうしたの！？」

保健室の先生が驚いた顔で俺達を見る。

「…怪異にやられまして。まぁ、正しくは怪異の起こした突風で吹きとんだ机が当たったんですが。」

レオンは半分笑いながら言う。

「…しばらく先生は寝かせておくわ。一応田所さんも寝てなさい。まぁ、貴方のクラスの委員長ならＬＨＲくらい大丈夫でしょ。貴方の彼女だし。」

「ちっ、違いますよ！！ただの家族ぐるみの幼馴染ですよ…。」

「へぇーっ。そうだったんだ？」

ニヤニヤしながらサウザは俺を見る。

「やかましいわ。ちっさい頃からずっと一緒だったんだよ。仕方ねぇだろ。」

「まぁ、逆に言えば、羨ましいです。」

「…あ？え？」

「いいえ、こっちの話です。じゃ、クラスに戻るかぁ―！」

サウザがわざとらしく元気に言う。…なんだ？こいつは。

ｃａｓｅ．　１０　道聴塗説

「じゃあ、これから…バドミントン…だっけ？そのチーム決めするよ！」

「バドルードだよユア。何さそのスポーツ…」

「あぁ、ごめんごめんバドルードだったね！
（…あっぶない危ない…世界線が違うんだった…。道聴塗説にならないようにしないと…。）」

「只今っ」

「おーレオン達帰ってきた！先生と咲は？」

「今寝てるよ。少し休めば大丈夫らしい。」

「そっか！あのね、能力戦争のチームも今決まったんだ！ほら、黒板に書いてるよ！」

ユアの言った通り黒板にはチーム名と名前が書いてある。…おい、チーム名って…

そのチームは以下の通りになっていた。ここで御理解していただけると次のｃａｓｅがとても楽チンだ。…え？あぁ、いや、こっちの話だ。

チーム／風林火山

・不動　勝～ふどう　しょう　『地震』（アースクエイク）（変）
・吉谷　颯～よしたにはやて　『竜巻』（ドラゴストーム）（攻）
・林家　静～はやしやしずか　『樹海』（リグノーサ）（変）
・火神　炎～ひがみほのお　『発火』（イグニッション）（攻）
・雷影　忍～らいえいしのぶ　『辻斬』（クロスワード）（攻）

チーム／リアライズ

・初日　優～はつひ　ゆたか　『硬化』（ロック）（変）
・音沙汰　真～おとさたまこと　『数学』（マスマティカ）（変）
・局長　宅～きょくながたく　『召喚』（サモン）（殊）
・楯谷　玲～たてたに　れい　『物理』（ニュートン）（変）
・海老原　涼～えびわらりょう　『化学』（ケミカル）（変）

チーム／ＳＴＯＲＹ

・臥竜　麗音～がりゅうれおん　『創造』（クリエイト）（殊）
・椰子岡優愛～やしおかゆうあ　『護』（ガード）（攻）
・皆藤　清彩～かいとうさあや　『生物』（バイオ）（変）
・鐘鈴サウザ～かねすずさうざ　『物質移動』（ポルターガイスト）（攻）
・田所　咲～たどころさき　『強弱』（パワー）（殊）

「風林火山って…オイ…」

「良いじゃねーかー。名前とか能力も一致してたんだしよ。」

と、不動が言う。
「神様の悪戯だな絶対。」
案外テキトーに作ってんのな。この世界。

「で、バドルードなんだけど、1チームって何人？」
「7人だよ。丁度クラスが半分になって、一人は監督を務めるんだ。」
「監督かぁ。監督やりたいって人いる？」
「…じゃあ、私やります。」
「あ、えっと…林家さんだっけ？」
「はい…。ちょっとスポーツは苦手ですが指導は得意ですので…。」
「大丈夫か？おとなしめの奴だが…」
「大丈夫だよ。ね？静ちゃん！」
「あぁ、やってやんよ！！」

「……」

一瞬にして教室の空気が凍りついた。絶対零度である。

「あ、いや、頑張ります！あは、あはははは…」

「…ｇｋｂｒ」

「静かなること林の如く…じゃないのか…」

麗音と真が震える。

「まぁ、いいじゃない！誰か、バドルードのルール説明とかしてくれる？」

「バドルードは、サッカーボールほどの大きさのボールを使うんだ。それを、ゴールに投げ入れる、もしくは専用ラケットで打って入れると得点になる。

投げ入れた場合はゴール得点にプラス１点、打って入れた場合には得点にプラス３点。

ゴールの大きさは大中小それぞれ３つ、全部で５つあるんだ。大は２つでゴール得点は１点。中も２つで３点。小が１つで５点！

ボールは、グラウンドのど真ん中に生えてる、バドルドツリーの枝に入れるんだ。先端リング状になってるからね！それがゴール。

得点についてはこれくらいかな？」

「あと、初歩的な事なんだが、バドルードってスポーツは乗りもの

に乗って行う。
　ほら、窓の外側見てみろよ！」
真は全員に言う。
「あ！龍星！！」
ユアの言う通り、グラウンドで龍星がミサイルの様な乗り物にまたがって怪異と闘っている。
「おい！怪異がいるぞ！？大丈夫なのか！？」
「3年生だから大丈夫だよ。俺たちはまだ怪異の授業受けてなかったし、対処法とか分からなかったから苦戦しただけ。
　ついでに、バドルードでは怪異も一緒に放たれるんだぜ？」
「マジかよ…。」
「あぁ。まず、乗り物についての説明だが、乗り物は3種類。
　一つは『エアーボード』。先端が上に少し曲がっててマイスナー効果で浮かぶ板状の乗り物。小回りが利くが扱いは難しいな。
　二つ目は『フォーミュライル』。龍星先輩が乗っていた乗り物がこれだ。流線形で風邪の抵抗を受けにくく、トップスピードが一番早い。
　で、三つ目が『サイクライド』。初心者でも扱いやすい椅子型の乗り物だ。ハンドルで方向を決められてスピードもそこそこ。バランス型かな？」
「確か、レオンとユアはエアーボードを持ってるよね！扱い難い乗り物ナンバーワンなのに…才能があるんだよきっと！」

「お、おう、も、勿論だ…」

オイ俺扱えるのか？この世界の俺は扱ってたようだが…。
少なくとも、足手まといにはならないようにしないとな…。

ｃａｓｅ．　１１　十遍読むより一遍写せ

「チームは7人、フォーメーションが決まってる。アタッカー・ブロッカー・ファイターっていう
ポジションがあるんだ。アタッカーとファイターはそれぞれ3人。ブロッカーは1人。
ブロッカーは自分のチームのゴールを守る役割。
アタッカーはボールをゴールに入れる、得点源！ブロッカーとアタッカーは競技中は能力の使用を
禁止されてるんだ。でも、ファイターは能力を使っても良い。
ただし、ボールや相手チームに使うのは反則。レッドーカードだ。
それと、バドルドツリーから生み出される怪異にのみ使用が許されてる。
怪異を倒すと、そこで倒した側に５０点の得点が入る。
試合は５０点先取で終了、もしくは１０分間の試合時間の間にどれだけ得点を入れてるか。
…理解出来てる？大丈夫？ユアはオーバーヒートしてるみたいだけど…。」

隣のユアを見ると、頭のてっぺんから煙が噴き出ている。知恵熱か…。

「…十遍読むより一遍写せってことだ。メモったりしろよ…」

「…うぅ…暗記は苦手なんだよ…一遍に物は詰め込めないんだよ…。」

もう死にそうな声で喋るユア。こいつは数学や化学、物理などは得意なのだが
生物や社会などは大嫌いかつ大の苦手だ。なんでも、脳の記憶容量が足りないとか。
…理論上人間の脳の記憶容量は無限大らしいんだけどな…。

「あ、そうだったな…。ごめんごめん。
まぁ、簡単に言っちゃったら…ほら、ハリー・ポッターが得意だったクィディッチの現代版！」

「あ、なるほど！」

「えぇえ！？」

理解しちゃったよこの子！！　書かないで！！　十遍読むより一遍写せってことわざ無視！？
ってゆーかハリーポッターと同じ世界線なの！？この世界！！！

「…あぁ、歴史習ってなかったね。レオンは。
ハリー・ポッターは世界でも有名な能力者だったんだよ。物語上では魔法とされてるけど、実際は能力だったんじゃないかって。
まぁ、小説ではファンタジー性があるって事で魔法ってされてるけど、そのクィディッチが派生して行って、今のバドルードがあるんだ。」

「…まさか空想上の物語だけだと思ってたのに…。」

驚愕だ。まぁ、一まとめにしたら魔法も能力も同じようなモノだしな…。

「で、チームはどうする？決め方。」

「さっきの決めた3チームのうち、二つのチームのリーダーが人を取っていくのはどうだ？」

「おぉ、いいなそれ。よし、…って誰だよリーダー。」

「風林火山は俺だ！」

と、不動が声をあげた。

「リアライズは俺な。」

と、続く局長。

「ＳＴＯＲＹはレオン！！」

「おいちょっと色々と待てや。」

俺はユアの首を締めあげる。

ぎりぎりぎりぎり。

「ちょ、ちょっ…まって入ってる入ってるって…あぁぅ…」

「まぁ仕方ねぇな。じゃーどーすんだ？」

レオンはユアを開放し、ユアが大きく息を吸う。

「死ぬかと思った…。」

「じゃんけんだな。最初は。」

「じゃー、いくぜぃ！！！」

じゃんけんの結果は局長と不動が勝利した。

「…レオンじゃんけん弱っ！！！」

「…そういえば小学校のころはおかわりじゃんけんで一回も勝ったこと無かったな…。不覚だ。」

「まぁー気にスンナ！俺が選んでやるからよ！」

「そういう問題じゃねぇ！」

と、公平に（？）選んだ結果が、以下の通りだ。

監督：林家　静

１軍

不動　エアーボード　：Ａｔｃ　◎
吉谷　フォーミュライル：Ａｔｃ
鐘鈴　フォーミュライル：Ａｔｃ
皆藤　サイクライド　：Ｂｌｃ
火神　フォーミュライル：Ｆｇｔ
雷影　フォーミュライル：Ｆｇｔ
楯谷　サイクライド　：Ｆｇｔ

２軍

局長　フォーミュライル：Ａｔｃ　◎
臥竜　エアーボード　：Ａｔｃ
音沙汰　サイクライド　：Ａｔｃ
田所　サイクライド　：Ｂｌｃ
椰子岡　エアーボード　：Ｆｇｔ
初日　フォーミュライル：Ｆｇｔ
海老原　サイクライド　：Ｆｇｔ

「おいなんで俺らが二軍なんだよ！！」

「まぁー、ハンデって事で良いだろ？俺らは勝つ！勝つ！勝ーーつ！！」

「…某地下労働から脱出するのが目標の伊藤さんのようになってるぞ…」

「かつ丼食べてーな。」

「…お前は沼にでもはまってろ。」

case．　12　起死回生

…自分なりに分析するとしたら…
相手はフォーミュライルっていうスピードの速い乗り物が多い。速攻型だ。
反対にこっちは超バランス型だ。これと言って特徴が無い…。
局長と俺、音沙汰でアタッカーをやるのだが、大丈夫だろうか。
俺ら3人は中学校からの悪友で、3長（生徒会長・放送局長・総括委員長）と呼ばれ、学校を動かす存在だったが今は関係は無い。
多分、連携は一番だとは思うが…。

と、そこで。

キーンコーンカーンコーン

「あ、ＬＨＲ終わった！」

「えーと、次は体育だ。みんな、乗り物を持ってバドルードグラウンドに集合！！」

「…マジかよ…。」

「まだ慣れてないけど、なんとか頑張るか…。」

『2時限目　体育～バドルード～』

「おーしお前ら！！チームごとに並んで座れぃッ！！！」

「…元気いいなあの先生。」

「…熱血の鋼師ってあだ名で呼ばれているよ。」

「…講師と掛けたって事か？」

「…誰が上手いこと言えと。」

「そこぉ！！！話をするなぁッ！！」

「すいませんでしたぁッ！！」

3人が同じことを言う。
勿論、臥竜・局長・音沙汰の3人だ。

先生の話によれば、これからバドルードの練習試合だそうだ。
どうやら基礎的な事は全て1年次の間にやっているらしい。…俺は知らんぞ。

なすすべもなく、フィールドに連れて行かれる。勿論、ユアもそれは同じだ。
アタッカー全員にラケットが手渡される。これを使ってバドルードの球を打ってゴールに入れる…。
非常に難しいように思えるが、ボールはサッカーボールほどの大きさにもかかわらず、少し硬めでかなり軽い。
どうやら木の実の様なモノをくりぬいて作っているらしい。

今日の俺とユアは徒歩で来たためにサウザが何処からともなく持ってきたエアーボードを借りることになった。
…便利だよな、物質移動（ポルターガイスト）…。

「今日は時間が無いから試合時間は半分の１５分だ！！怪異も弱い物となっているから安心して闘え！」

「…ユアちゃんは能力では戦えないから、チームメイトを守ることに専念してね！」

「もちろん！！」

「では、ジャンプボールから。一人誰か出て来い！！」

「じゃーリーダー。不動！」

「こっちは局長で。」

「え！！俺不得意だぜ！？」

「…早く行けのろまが。」

「…チッ、音沙汰、覚えてろよ…」

「いいか？じゃぁ、試合、開始！！！」

先生がラケットでボールを天空へ打ちだす。
それが合図なのか、一斉に全員が乗り物に乗って空へとびだった。

「うわっ早っ！！！！」

俺は皆のスピードについていけず、出遅れていたが、それはユアも同じだった。

俺たちはエアーボードに乗り込み、足元のスイッチを押した途端に発進してしまったので頭から落下。

強く打ちつける。

「痛ってぇ！！！」

「もー、何これ！！」

ユアに至っては泥まみれになりながらその泥に八つ当たりをしていた。

「何やってんだ臥竜！！！早く来い！！！！」

「お前らどうやって乗ってんだよそれ！！」

「俺はフォーミュライルで音沙汰はサイクライドだ！！知らねーよ！！」

「えぇー…嘘だろ…」

その言葉は俺達をどん底に突き落としたのだが、天使が同時に舞い降りた。

田所がサイクライドから降りてきて、俺たちに説明をしてくれた。

「ユアちゃん、麗音君、久しぶりで忘れちゃった？
まずはこのセーフティベルトを足に付ける。これで足は固定されたから振り落とされないよね。
で、つま先でこのアクセルを押したり離したりすることで進んだりブレーキが出来るんだよ。」

「ありがとう咲！！」

「恩に着るぜ…」

「いいよいいよ。さっき助けてくれたんだしね！」

ぴーーーーっっ

と、ここで先生の笛が鳴る。どうやらブロッカーの咲がこっちへ来ていたためにアタッカーの二人で護りきれなかったらしい。
大きなゴールに入ったために、得点は小さいがそれでも先取されたことに変わりはない…。

「あっ…もう戻らなきゃ…。点、取られちゃったね…。」

「気にすんな！俺らが起死回生の逆転劇、見せてやる！！行くぜ！！」

「…まだ一点しか取られてないから起死回生でも何でもないけどね…。」

二人は咲に教えてもらった通りにアクセルを踏んで発進した。
その動きはぎこちなかったが、スキーよりもスノーボードが得意な

二人はすぐに乗りこなした。

「あれ、怪異は…？」

ユアが皆藤に訊く。

「どっちかが得点を取った瞬間から怪異は生み出されるんだ。ほら、出てくる…ってあれは！！！」

バドルドツリーの奇妙な幹から胃の蠕動運動をするように出てきた怪異はあの『歌舞伎鳥』だった。

case．　13　矛盾

「なんで…死んだんじゃなかったの！？」

「…僕は能力を使用すれば負けてしまいます。…後は頼みましたよ！！」

そう言ってサウザはアタッカーの方へと戻る。

「…逃げたなアイツ…。」

「先手必勝っ！！！発火（イグニッション）！！」

火神が得意の発火能力で歌舞伎鳥を燃やす。

羽毛などが燃えだして、相当ダメージが大きそうだ。

「焼き鳥になっちゃえッ！！」

「うわっ、倒されちまうっ！！　化学（ケミカル）！！空気中の物質、”ＣＯ２＋２Ｈ２→　２Ｈ２Ｏ＋Ｃ”に変換ッ！！」

海老原が能力を使い、空気中の二酸化炭素と水素を反応させ、水を作りだして歌舞伎鳥に浴びせ、鎮火させた。

「何だよそれ！！！そんな反応聞いたこと無いよッ！！」

「俺の能力はその化学物質さえあれば無理やりにでも反応できるんだ！！」

どうやらその言葉は本当らしく、余ったCはススとなって燻っていた。

バサァッッ！！！

と、今度は歌舞伎鳥が大きな翼で突風を起こしてきた。

「くっ…また風か…」

「これじゃあ埒が明かない…んっ！！」

ユアは仲間3人を囲む透明なバリアを張る。

「海老原君、初日君、大丈夫！？」

「あぁ、俺は大丈夫だ…」

「俺もだぜ。ありがとな。」

「向こうの3人はまだ突風に気を取られてるね…。」

「俺の能力を使えば、海老原と椰子岡が突破できるかも知れねぇな。
狙いは…こうだ。」

初日は海老原とユアに耳打ちをして、作戦を伝える。

「おまえ、すげぇな！」

「さっすがぁ！！」

「…まぁ、そうも言ってられねぇぜ。椰子岡の盾もそろそろ限界だ。取らぬ狸の皮算用はここまでにして一発、やってみるぞ。行くぜ！！」

その掛け声とともに盾が崩壊し、三人は飛び出して行った。
フォーミュライルの初日は風を諸ともせずに加速し、歌舞伎鳥の後ろでホバリングをする。

「いいぜ海老原！！椰子岡！！」

「ハァッ！！」

ユアは小さな無数の小さな矛を作りだして腕一杯に抱える。
どうやら先は鋭く尖っているようだ。

「おっしゃっ！！　化学（ケミカル）！！　”ＣＯ２→Ｃ＋Ｏ２”　に変換！！」

海老原が腕を突き出すと、ユアの作った六角形の物体がキラキラ光る物体に変わっていった。

「…あれは…ダイヤモンド！？どうして矛が！！というか、盾だけしか作れないんじゃないの！？」

「私の作る盾は空気の分子の動きを止めて、一時的に固まらせているだけなの！（流星曰くね！！↑）
それに、何故か矛も作れたっ！！」

何故か物凄く嬉しそうにはしゃぐユア。

「…文字通り『矛盾』してるわね…。あの子の能力…。」

「そうだっ！！だから空気中の二酸化炭素を分解して炭素をダイヤモンドに能力で変えたんだ！

だが…人工ダイヤはまだ硬くねぇなぁ…」

初日は長い前髪で顔を隠し、口だけで笑った。

「硬化（ロック）！！！」

初日が能力を使用し、ダイヤモンドの硬度を格段的にあげた。

そしてそのまま…

「いっけえええええええ！！！！」

ユアが撒いたダイヤモンドで出来た槍は3人の乗り物で打ち込み、超スピードで歌舞伎鳥に向かって飛んでいき、翼を貫いた。

だが、まだ弱弱しく羽ばたいている。

「上手くいったか！？」

「嘘でしょ…なにそれ…。」

楯谷が弱弱しく言う。

「いやまだ倒されてないよ…歌舞伎鳥を見て！！ぎりぎり隈取りは消されてない！！」

火神の言う通り、まださっきの水を浴びてもなお隈取りは残っていた。

「…ダメージを与えても隈取りを消さなければ倒せないのかよ…ッ」

「じゃあ、どっかから水を…。」

「いや…待って火神…なんか、様子がおかしいよ…？」

瀕死寸前の歌舞伎鳥は堕天し、地に落ちた。
しかし、強靭な二本の足で立ち上がって奇妙な踊りをし始めた。

「…踊ってる…？」

「…あれは…歌舞伎をやってるよね…」

相手チームのファイターもこちらのチームも全員が歌舞伎鳥の踊りに見蕩れていた。
ユアは他の人ほど見蕩れてはいなかったのだが、そのおかげでいち早く危険な事に気が付いた。

先生が、なにやら叫んでいる。
しかし、催眠術の様なモノにかかっているのか、意識ははっきりする物の先生の声は届かない。
ユアは歌舞伎鳥を再度見る。その地面には何やら紋章のようなものが描かれていた。

そして、思った。

何か、危ない…と。

ユアは咄嗟にファイター6人を包み込む巨大なバリアを張った。
そして、そのコンマ数秒後にバリアよりも恐ろしく巨大な『熊』の顔が牙を剥き、こちらに向かって突進してきた。

「きゃぁぁぁぁぁ！！！！！！！」

「うわあああああ！！！！」

全員が畏れ戦き、守ってくれたユアに感謝する事さえも忘れたほど、恐怖に包まれた。
それと同時に、5人がかかっていた幻覚も解放された。

「逃げろ！！！！それは『熊鳥』という『妖魔（ようま）』だッッ！！！！！」

先生が大声で叫び、危険を知らせる。

「妖魔！！？？　なんでッ！！？？」

「えっ…えっ！？」

ユアは全員が驚いていることの意味が分からなかった。怪異と妖魔の区別なんて習っていないためだ。
しかもそれ以前に妖魔の存在を知らない。

そう慌てふためいている間にまた熊が襲ってきた。
しかし、今度は相手チームの吉谷が能力を使う。

「さっきは歌舞伎鳥が突風を使ってきたけど、今度は僕が使う！！
竜巻（ドラコストーム）！！」

大きく腕を突き上げ、交差させると突然大きな竜巻が発生してその中に巨大な熊が包まれた。

「…なんでさっきは使わなかった？十分強力な能力じゃねぇか」

初日が問う。

「…もしも歌舞伎鳥の能力が『風』系だったなら、僕の能力を吸収して強化されるかもしれないだろ？」

「…そんなこともあり得るのか…。」

「…おっと、話してばっかりでもいられないよ。来る！！」

熊が竜巻を振り払い、白虎の如く飛びかかってくる。

「させぬ！！フンッ！！！！！　強化ッ《ストレス》！！！！」

と、ここで熱血の鋼師が地面から飛んできて、その巨大な腕で熊を殴り倒す。

能力で自分の体を強化したのか、さながらウルトラマンのようになっていた。

熊は地面にたたきつけられ、先生は能力を解除する。

「バドルードは中止だ！！！アタッカーとブロッカーもこっちに来い！！！！！」

と、先生が後ろを向き、麗音達に言う。そのとき。

「先生危ないっっ！！！！」

「何…！？」

突然、歌舞伎鳥の方が先生を鋭い爪で鷲掴みにし、上空から地面に叩きつけた。

ドシャアアァァァッッ……

先生が叩きつけられたところは地面がへこみ、クレーターが出来ていた。

「…なん…だと…」

「歌舞伎鳥と熊鳥が両方いる！？」

先生が叩きつけられたところには巨大な熊と歌舞伎鳥がこちらを見据えてただただ待っていた。

case.　14　諸刃の剣

「おいおい何の騒ぎだ…って…」

アタッカーの6人が到着すると、こちらの様子を見て愕然としていた。

「椰子岡！！どういうことだ！？」

声を荒げて音沙汰が言う。

「突然、弱いはずの怪異が暴走して先生を！！！」

「…チッ、やるぞ！！」

「臥竜！！お前の能力は！？」

「俺は『創造（クリエイト）だっ』」

「創造（クリエイト）ぉ！！？？」

ユアを除く、全員が言った。

「…お、おいおい…なんだ？強すぎて驚いたのか？っていうか、黒板にも書いただろ！」

「逆だ逆！！！最弱な能力だよ！！！！」

「えぇ！？」

ユアも驚く。

「いや…特殊系最弱の能力であり、最強の能力でもある。
『具現化』出来る能力は少ないからな。ただし、使い方によっては何もできないぞ。」

「最弱…だと…」

あっけにとられる麗音。

「だから、使い方を考えれば最強なんだって。ただ、物理干渉が出来ないというのが欠点だが…。」

「例えば…どんな使い方をするんだよ？」

「そうだな…例えば…」

「ゆっくり話してる暇はねぇぞ！！！下から来るぞ！気を付けろ！！！！」

「…とか言って上から来るんだろぉ？知ってるぜそのネタくr…ガッハァッ…」

歌舞伎鳥の翼で思いっきり殴られる局長。スカイアッパーである。
案の定、アドバイス通り、下からだ。

「…バカだろアイツ…」

「…乗り物で浮いてるんだから下から来る事は分かるでしょ…」

「くっ…いってぇなこの野郎…」

局長が口を拭う。…が、血は出ていない。

「…あれだけ力一杯殴られてるのに血の一滴も流れていないのか…。」

「バカだから丈夫なんだろ。」

「誰が馬鹿だ真！！」

「…危ないってぇ！！」

パキィンッ

と、ユアが防御壁で全員を包む。…が。

熊の鋭利な爪が壁を通り抜けて引き裂いた。

「キャァアアアアアアッッ！！！！！」

「ユアッ！！！？？？」

レオンは必死にエアーボードで飛ばされるユアを追いかけて、受け止めた。

「ぐっ…ああッ…ユア、大丈夫か…？」

「レオン…ありがと…」

「気にするんじゃねぇ…それより、何故熊の爪がユアの壁を無視したんだ！？」

「…ユア！！君の能力は『攻能力』だったよね！？」

「う、うん！！それがどうしたの！？」

「…と、いうことはユアの防御壁は物理干渉が出来ると言うこと。逆に考えれば、あの熊は物理干渉が出来ない、もしくは無視できる…ということだよ。」

皆藤が額に冷や汗を流しながら言う。

「そうか！！だから局長の体に直接的ダメージが無かったんだ！」

「でも、先生は直接熊を殴ったよ！？熊には物理干渉が効いている…。」

「それに、最初ユアがバリアを張ったときには牙で襲われたし、それを防ぐことは出来たよ！？」

「…と、いうことはだ。あの熊の爪のみ、物理干渉が効かないんじゃないのか？」

「そうか…。危険だが、試してみるか？先生も気絶している。俺らでやるしかないぜ…」

「でも、どうやって？」

「簡単さ。さっきの様にダイヤモンドを空気中から合成して熊に当てれば…うわぁっ！！」

熊鳥が海老原めがけて爪で攻撃してきた。

間一髪で避けられたが、話をゆっくりしている暇はないようだ。

「…俺がやった方が早いぜ！『召喚（サモン）！！～鉄塊（スチール）！！』」

局長が能力を使用し、鉄の塊を呼び寄せて熊の体に向けて発射した。

「…どうだっ！？」

全員が息をのんで見守る。すると…

「なっ…鉄球が熊を通り抜けた！？」

鉄球は熊の体をそこに何もないかのようにするりとすり抜けてしまった。

「……」

サウザは黙り込む。何かを考えているようだ。

その間にも熊は攻撃の準備をする。

今度は歌舞伎鳥が暴風を起こし、こちらを怯ませてきた。
「くっそぉ…この風を椰子岡のバリアで防いだとしても…ッ」
「熊の攻撃が来る…身動きがとりづらくなるんだ…」
「どうしろっていうのよ！！もう！！」
「…一か八か、やってみますか。」
サウザが名乗りを上げる。
「名案が思い浮かんだのか！？」
「分からない。でも、このまま全員がやられるより僕が重傷を負う覚悟で行けば…」
「んなこと言っても、諸刃の剣じゃないか！！」
「でもやるしかないんだっ！！！！」
サウザは強くそう訴えた。
「…カッコいい所取りやがって…（主人公俺なんだけどなぁー…）」
「よし、頼むぞ鐘鈴！！」
「えぇ！」
爽やかに返事をした後、サウザはフォーミュライルのギアを深く入

れ、物凄いスピードで突っ込んで行った。

case. 15 Not to hallloo until one is

「おい！！？？まさか特攻するんじゃ…」

「自爆かよぉ！？嘘だろ…」

「熊に当たるっ…！！！！！」

と、サウザが特攻をしかけた…と皆が思った。
しかし、サウザは熊の体を通り抜けて尻尾から出てきた。

「サウザっ！！！！！」

「なにぃっ！！？？」

サウザは出てきた後から何か考え込んだようで…

「やっぱり…。ユアさん、全員を取り囲むバリア、もう一度張れますか！？」

と言った。

「まだ行けるよッ！！！！」

ユアは全員を取り囲む。

サウザはレオンたちのところへ戻ってきて、説明をする。

「あの熊は、歌舞伎鳥の生み出した『幻影』です。」

「幻影！？じゃあなんで俺らにダメージが…」

「ただの幻影ではなく、熊鳥という妖魔その物を作りだす、『幻術』の能力を歌舞伎鳥が持っている物だと思う。

通常怪異は一つしか能力を持っていないんだけど…そこは後で考えよう。

あの妖魔に勝つ方法は、『全員が熊鳥を幻影だと認識していること』。」

「全員が認識…？」

「そうか！！局長は実体があると思い込んだから鉄球が通り抜けてしまい、サウザも最初は実体があると思い込んだからすり抜けたのか！」

「そう。歌舞伎鳥自身は実態があるけども、熊鳥には実態は無い。さっきの攻撃だって熊鳥の幻術によるブレイン攻撃だったんだ。」

「つまり、脳に直接ダメージを与える事で脳が錯覚を起こし、神経系に『痛い』という信号を送ったのか！！」

「でも私の盾をすり抜けて攻撃してきたのはどうやって説明するの？」

ユアが怪訝そうな顔をして問う。

「それは能力としての特性だ。攻系（アタック）の能力は自らの意思とは別に『適応』と言う特性を兼ねている。物理には物理。不明な物には万能。
椰子岡が攻撃を防いでから能力自体の特性が物理だと誤認してしまったために
次の幻影の攻撃は防ぐことが出来なかったんだろう。」

初日が詳しく説明を付け加える。

「厄介な事に、歌舞伎鳥と隈鳥は隈を消すしかない。
だから、海老原が水を作りださなければならないんだ。最初に歌舞伎鳥の方を頼めるかい？」

サウザは爽やかに頼みごとをする。そして、海老原も同じように爽やかに返事を返す。

「おぅ、良いぜ！！」

返事の跡に、海老原と初日はともに歌舞伎鳥の方へと向かって行った。

「さて、問題は熊鳥の方。こいつは全員を認識させるのに少々手間がかかるんだけど…
レオン、ユアさん、君達の能力が必要だ。」

「分かったよ。」

「あ？俺？」

一応主人公であるのにもかかわらず随分と影が薄い奴が素っ頓狂な

声で返事をした。

「何間抜けな声出してんの…。一応主人公でしょ。」

「ユアまで…ひでぇ…」

「まぁどっちにしろ私達がやるんだよ。準備は良い？」

「あ、あぁ…」

いつでも準備は万端だがどうにも力の出ないレオン。

「ユアさんのバリアの中の空間を『本当の姿を現させる空間』に変えるんだ。出来る？」

「やってみるしかねぇだろうよ？」

「じゃあ、いっせーのーで！！ので！！で同時にやるんだよ。いくよ？」

「お、おぅ…」

『いっせーのーで！！！』

「囲え！！護（ガード）！！」　「創造（クリエイト）せよ！！」

「出たっ！！！」

「…こ、小熊！？」

ユアとレオンの能力で姿を現したのは小さな大人になっていない小熊だった。

そして、ユアは驚いて能力を解こうとした。しかし、

「能力を解かないで！！元に戻ったらまた幻覚にかかってしまう！！」

「そ、そっかぁ…」

「……」

レオンは何かを考え付き、能力を使った。

その瞬間、バリアが消えて小熊がその場所に四つん這いで歩くだけになった。

「えっ！！？？バリアが！！」

「大丈夫だ。俺が解いたんだ。」

「レ、レオンが！？」

「あぁ。」

レオンが額に一つ汗を流して言った。

「…どうやら使いこなせるようになったみたいだな。」

そう局長が言うと、

「あぁ、おかげさまでな！」

とレオンは局長にウインクをした。

「一体何をしたんだ？」

「あのバリアの中身を『能力を使用不可能にする空間』に変えたんだ。

だから一緒に包んでいたユアのバリアも消えてしまったってことだ。」

「なるほど。」

「ただ、効果は長くないんじゃないか？…詳しい事は分からないが俺の体力がどんどん…」

「殊系（スペシャル）の能力は他の能力よりも遥かに体力消費が大きい。早めに海老原が水を持って来ないと！！」

「俺はここだっ！！！いっくぜ！！」

「俺も一緒に！！」

歌舞伎鳥を火神が突き飛ばし、小熊の方へと叩きつける。

その瞬間、海老原が、化学（ケミカル）で水を作りだし、

吉谷が、竜巻（ドラゴストーム）で水を一気に巻き上げ、雨を降らせた。

その雨は歌舞伎鳥と小熊の隈を洗い流し、小さな小鳥と隈の消えた小さな熊がそこに横たわった。

「よっしゃあああああああ！！！！！」

「怪異と妖魔、両方倒したぞ！！」

そんな歓喜の最中で、

「…くっ、限界…だ。」

「少し、疲れたな…」

監督である林家を除いて全員が、安心しきったのか体力を使い果たしたのか

その場に倒れこんで、眠りに落ちてしまった…。

そしてそこへ、グラウンドへ一人の人間が校舎の方から現れた。

「…そうか、怪異1体と妖魔1体の同時相手にも勝利が出来るほどの能力を持つ2チームか。

能力があるのは認めよう。しかし…」

その人間は天を仰ぐようにして言った。

「これは私達にとって手ごわい相手になりそうだな…。」

そして、その人間に気付いた監督の林家が駆け寄ってきて、言った。

「…あら、何をしに来たのかしら？アルバトロス。」

「…お前には関係のないことだろう。あぁ、そうだ。一つ、忠告し

ておこうじゃないか。」

「……」

「怪異や妖魔は一度倒したと思っても怪異の能力や人間の能力で復活する事がある。それを知らないのか？」

と、手の平を横たわる小さな小鳥に翳す。

すると、その鳥は真っ白な灰になって風に乗って消えた。

熊にも同じことをするが、こちらは目を覚ますだけで2人の存在に気付くと、一目散に走り去ってしまった。

「いいえ。知っているわ。勿論、その小鳥たちを逃がすつもりだったけど灰になったって事は…。」

林家は少し考えた後で続けた。

「可哀そうだとは思わないの？無理やりに怪異を作り上げて。今の鳥だってまだ生きられたはずなのに。」

「今更俺に何を言っても無駄な事は知っているだろう。使えるモノは親でも使え…だ。

それに、まだ忠告は終わっていない。」

「早く言いなさいよ。授業時間はもうとっくに過ぎているのよ。」

「…Ｎｏｔ　ｔｏ　ｈａｌｌｏｏ　ｕｎｔｉｌ　ｏｎｅ　ｉｓ　ｏｕｔ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｗｏｏｄ.

油断していると、痛い目に遭うぞ…。」

そう告げると、その人間は校舎の方へ折り畳み式のエアーボードに乗って飛び去ってしまった。

「…結局私がこの１４人を運ばなきゃならないのね…。先生を呼んできましょう。

さっきの忠告通りなら私も危ないでしょうし。勝って兜の緒を締めよ…か。」

そう言って林家も校舎の方へと走っていった。

case. 16 図星を指す

「…ここは…？」

最初に目が覚めたのはユアだった。
子供のような仕草で目をこすり、ふと横を見る。

「あら、目が覚めたのね。おはよう…いえ、おそよう！」

林家はユアのすぐ横で正座をしていた。
クラスの林家以外の全員が体育館のマットの上で眠っていた。

「静ちゃんは無事だったのね。全員を一人で？」

「いえ、すぐに目が覚めた局長君と一緒に運んだんだよ。」

林家が指を指す方向には局長が居た。

「ありがとね！局長！」

「…目が覚めたのか。」

振り返らずにユアに言う局長。
そして、続ける。

「今は４時限目でもうすぐ昼休みだ。体育館を貸し切っているから
全員を運びたいんだが…。
椰子岡の力じゃあなぁ…。」

「では、僕の能力を使いましょうか？」

「あ、サウザ！」

「おそようございます。」

サウザも目を覚ましたようだ。あくびをして、いかにも眠そうな表情だ。

「物質移動（ポルターガイスト）でか？」

「えぇ。その方が楽でしょ？」

「じゃあ、頼むが…お前と椰子岡、そしてこのすっとぼけた顔で爆睡してやがる臥竜に話がある。

まぁ、こいつらを運んだら昼休みになるだろうから、飯食った後にでも中庭に来いよ。」

「話？今ココですれば良いじゃない。」

「…ちょーっと長くなるかもしれないからな。それに、中庭の方が都合が良い。」

「都合？」

そんなユアの問いには耳を傾けず、局長はレオンを背負ってサウザに言った。

「ポルターガイスト、頼んだぜ！」

「…なぁ、ホントに局長が言ったのかよ？」

「ホントだよ…。ねぇ、サウザ。」

３人は昼休みになると、クラス全員が復活したのを見届けてから中庭へと向かった。

「うん。あー、えと、いつから僕のこと下で呼んでたっけ…」

「あぁ、こいつは誰でも下の名前で呼びたがるんだ。局長とかはあだ名っぽいからそのままだけど。」

「…苗字の読みって局長（きょくなが）だけど、あだ名は局長（きょくちょう）…ってこと？」

「あぁ、そうだ。」

「（…文字じゃわかるわけねーだろ！！！）」

と、サウザは思った。

「…まぁ、大体聞かれそうな事は分かってるけどね。」

「え？」

サウザが独り言のように言った言葉をユアは聞き逃さなかった。

「お、あれ局長じゃね？」

「サンドイッチ頬張ってる…」

そこには、中庭のベンチに腰掛けながらサンドイッチを頬張っている局長の姿があった。

すると、こちらの視線にも気付いたようで、残りのサンドイッチを飲み込んでこちらへ手招きした。

「で、話って何だ？」

「…単刀直入に言った方が良いか？」

「…まぁ、回りくどいのは推理小説のトリックだけで十分だからな。」

「じゃあ、単刀直入に言う。」

局長は立ちあがって、ユアとレオンの前に立った。

「…お前ら、この世界の椰子岡優愛と臥竜麗音じゃあねぇだろ。」

その言葉に、二人は怯んだ。

「…まさか分からないとでも思ったのか？…いや、他の奴らは分かって無いかも知れんが。」

二人が何も言えずにただ立ち尽くす。

図星を指された。

何もかも見据えているような目。

多分…いや、確実に誤魔化せはしないだろう。

局長は続ける。

「お前たち二人は1年生の時はトップクラスの成績、身体能力で能力を使用しての2年生の授業の成功も
約束されていたような存在だった。先生たちから呼ばれていたその肩書きは『サイノウの塊』
生徒たちからも『国士無双』とまで評されていたのにも関わらず。
2年生からの授業は今日からだが、いつも乗りなれていたはずのエアーボードから転落。
能力も最弱と判明。教科書もまるで理解していないようだな。その様子だと。予習はどうした？」

言葉のナイフでめった刺しにされる二人。
それでも局長の口が閉じる事は無い。

「挙句の果てには質問だらけと来た。正直、俺は嫉妬もしていたんだ。お前らの『サイノウ』に。
何故落ちぶれたんだ。答えろ。」

真剣な眼差しで二人を見る局長。

「それは…」

サウザが口を挟もうとするが、俺が制止し、答える。

「それは、局長の言う通り、俺らが別の世界軸の人間だからだ。
能力が当たり前の世界に、平凡でつまらない世界から入れ替わりで来た。」

「…やっぱりか。で？その手助けは誰にしてもらったんだ？」

「…龍星。水無月龍星だ。」

「分かってんだよ。」

…は？

「いや、分かってるんだったら質問なんかしなくても…」

「お前らじゃない。召喚（サモン）。」

局長が瞬時に能力を使い、弓矢を出して俺とユアの間…大体幅で言うと5センチといったところか。
そんな狭い隙間を高速で射った。

風が通り抜けるのを感じ、俺らが振り向いたその先には矢を握る龍

星の姿があった。

case. 17　大山鳴動鼠一匹

「何時からだ？召喚の能力を持つ者よ。」

「最初からだ。始業式の時以来ずっと。」

「ほぉ…。」

「始業式の日の放課後。俺はフォーミュライルで散歩をしていたんだ。

明日の体育でバドルードをやるって聞いていたものでな。練習も兼ねてだ。

そうしてグラウンドに入った途端に突然磁場が狂って俺は墜落したんだ。

起き上がって見ると、『透自由媒体（クリアデバイス）』で壁を形成してるじゃねーか。

何故だ？空路交通法でクリアデバイスの使用は許可区じゃないと使えないはずだろ。」

「…まぁ、そう言うことだ。」

龍星は後ろを向いて小さく歩き出す。

「ちょっと！！どういうことなのよ！？」

ユアの叫びを龍星はまるで耳に入っていないかのように無視する。

「…ピアスだ。」

「え？」

局長の小さな囁きに俺とユアは耳を揃えて聞く。

「あのピアスを破壊すれば、奴の正体が分かるはずだ。
俺は召喚の能力を持っているから既に警戒されている。お前らで出来るか…？」

確かに、龍星の耳にはかなり大きなピアスがあった。しかも、片方だけ。
そのピアスは怪しげに一定の間隔で赤く光っている。
何故最初に会った時に気付かなかったのか不思議なくらいだ。

二人は、顔を見合わせて頷く。

「鐘鈴…、こいつを使え。小さな爆弾だ。」

と、局長は手の平に直径2センチくらいの小さな機械を召喚する。

「…どこからこんなものを召喚するんだよ…」

「今は気にするんじゃない。ポルターガイストでこいつを飛ばすんだ。虫をふっ飛ばす程度の力
しかないが十分なはずだ。」

「OK…。」

「私は何をすればいいの？」

「…そうだな、ポルターガイストで爆弾を飛ばしたらすぐに俺らをバリアで囲ってくれ。」

「…虫をふっ飛ばす程度の力しかないのにか？」

「ね、念のためだ念のため。」

口元が僅かに緩んだ気がしたが、気のせいと言うことにしておこう。

「俺の合図でやるぞ…3，2，1，…」

ヒュオンッ

と、かなりのスピードで爆弾を飛ばす。

その瞬間、

ドグァァァンッッ

と爆音が中庭に轟き、その辺の地面は爆風で吹き飛んだ。

「これが虫をふっ飛ばす『程度』の能力かよ！！？？
　これじゃあ大昔に住んでた超巨大トンボをふっ飛ばすよりも強いだろ！！！」

俺は大声で局長を怒鳴り付けた。

「いやー…ほら、これぐらいの爆発だって言ったらお前ら絶対止めるもん。」

「そりゃそうだ！！！」

俺は呆れ果てて地団太を踏む。

「そんなに大げさな爆発じゃなくてもピアス如き破壊できるだろ！！」

「りゅ、龍星は大丈夫なの！！？？」

「それは心配しなくて良い。奴は…人間じゃない。それに、大山鳴動鼠一匹じゃないことが今に分かるさ…。」

「…え…？」

と、局長が言った瞬間、砂埃の中から昨日見た、クリアタイプのベルリンの壁が中庭全体を囲った。

先ほどの爆発音で全校生徒が中庭に駆け込んでくる。しかし、その壁のせいで入って来れない。

「くっそ、どうなってんだこれは！！」

「…おい、バドルードの練習をやってる奴が地場の狂いのせいで落下して大怪我してるぞ！！」

「保健室の先生呼んでこい！！あの人は『完全治癒（パーフェクトリカバリー）』を持ってるから！」

「…西園寺先生、どうします？」

「…ルークフェイスの仕業か…仕方ない。戦争を起こします。」

「…能力戦争を、今日からですか？」

「組織の方がまず攻め込んできているんだ。こちらも対策を練らねばなりません。まずは先生達に職員会議の準備を。」

「了解しました。」

「…ヒョウテキ…カクニン。」

「きゃっ！！」

爆発のせいで水無月の顔を覆う人工皮膚が爛れてボロボロになって、機械が露わになっているの

をユアが見て怯む。

その瞬間に４人を囲うバリアが消えてしまった。

「透自由媒体（クリアデバイス）セッチカンリョウ。ガイブカラノシンニュウヲシャダ

ン。…カクニン。
４ニンノセイタイハンノウヲサイカクニン。セイタイハンノウノテイシニウツリマス。…ジュンビカンリョウ。
クワエテ、ミナヅキリュウセイノ能力（スキルマリオネット）を与えられた人形トシテノカドウヲキョウセイシュウリョウサセマス。」

「ば、バカ！！椰子岡！！バリアを！！！」

「３．２．１…」

「間に合わないッッ！！！」

ユアがそう叫んだ瞬間、

「爆発（デストラクション）。」

「危ないっ！！！！」

誰かが、クリアデバイスを通り抜けて侵入してきた瞬間に、水無月龍星と名乗ったロボットは爆発した。

物凄い爆風がクリアデバイスの中で反響しあって鼓膜が破れるほどの音を出す。

「…せ、先生…？」

「…大丈夫…か？お前ら…」

爆発で弾け飛んだ破片などが先生の体に突き刺さっている。
あの、熱血鋼師だ。

オイオイ、鋼の体じゃ…ないようだな？

「先生こそその身体！！！」

「大丈夫よ。私の能力で完全治癒（パーフェクトリカバリー）するから。」

どうやら、先生が筋力（ストレス）で体を肥大化させて、俺達を守ってくれたみたいだ。

保健室の先生が能力で先生の傷をみるみるうちにふさいでしまう。

「でも、どうしてクリアデバイスを通れたんですか？」

「それは私がやりました。」

出てきたのは、能力化学を教えている、小林先生だった。

「私が能力、『電子（エレクトロン）』を使って先生の体細胞を一時的に電子よりも小さな大きさに変化させたんです。

そして、量子トンネル効果によって物理的に通る事が出来ないと言われているクリアデバイスを通らせたんですよ。」

「まぁ、事実上不可能な事を出来るのが能力なんだよね。」

「実際、先生の筋力（ストレス）と同時にやってなければ細胞が戻らず、死の危険さえある危ない状況だったんですが、

君たち４人の命を助けるためなら…と、先生がどうしても言うので。」

「…まァそう言うな小林先生！こうして助かったわけだし！」
ガハハ、と熱血鋼師が笑う。
「しっかし…既に能力戦争の宣戦布告ですか…。」
「まだ授業パターンは組まれていない事ですし、明日から能力戦争についての授業をメインにしましょう。」
俺たち４人が話に着いていけない状況で、サウザが口を開く。
「すいません！！僕が油断をしていたためにこんな状況になってしまったんです！！
僕が存在しない生徒だと言うことに気づいて居れば！！」
土下座をしながら謝る。しかし、先生たちの後ろから現れた長身の髭を生やしたおじさんが出てきて、顔をあげなさいと言った。
「校長先生！！」
…そう言えば始業式の時に見た気がするな…。
「鐘鈴君、君は悪くないよ。まだ禁則能力に対しての対処法を学んでいないからね。」
「禁則能力？」
「…おや、君は椰子岡さんではないか。君なら知っていると思ったんだが私の思い違いかね。」

「…す、すみません。それについては後でお話をしないといけません。」

「…まぁ大体は予想がつく。そうだな、放課後に校長室に臥竜君と来なさい。ゆっくりティータイムでもしようじゃないか。」

と、校長がほほ笑む。

そして、真面目な表情になって続けた。

「先ほどの…いや、そこに破片となって転がっているサイボーグは『能力を与えられた人形（スキルマリオネット）』と呼ばれる物だ。

これは物体に何かしらの作用で能力を与えられた物のこと。これの動物が怪異や妖魔を指す。

で、今回の能力を与えられた人形（スキルマリオネット）の能力は『人間操作（ヒューマノイドコントロール）』。

この能力で君たち3人は騙されていたにすぎないんだよ。だから自分を責めるのは間違っている。」

そして、次に局長に視線を移して続ける。

「しかし、君はどうやら正体に気付いていたようだね。どうやって能力を破ったんだい？」

「僕の能力で『能力鎧（スキルガードナー）』を召喚して使いました。」

「そう言うことか。君のような強力な能力を持つ人間は能力戦争でも強い勢力が期待されるから

ね。気をつけなさい。」

そう校長は局長に微笑んで校舎の方へと向かった。

ｃａｓｅ．　１８　馬耳東風

その後は、５時間目と６時間目が普通に有ったのだが、なにせ疲労感が半端なかったために授業内容をほとんど覚えていない。
午前中３時間寝たのにもかかわらず俺は一日の授業の六分の五を寝て過ごしてしまった。
…後でユアにノートでも写させてもらおう。

そして、帰りのＳＨＲが終わるとユアに呼び出しを食らった。

「ほら、校長先生が呼んでるんだから早くいかないと！」

俺の腕を握りしめて半ば強引に連れて行かれる。
…クラスでは指笛や怒りの声が聞こえていた気がしたが馬耳東風と言うことにしておこう。

ユアはノックをして失礼します、と声をかける。
すると中からどうぞと低い声が聞こえた。
それを合図に俺たちは校長室へ入る。

「よく来てくれたね。ほら、そんなに頑なにしなくて良いよ。腰を掛けて。」

と、校長の横に居る先生？と思われる人が何やら能力を使ってソファを移動させて俺達を膝カックンの要領で無理やり座らせた。

…まぁこのような事をされると頑なにしようとしても緊張がほぐれるわけで。

「ちょっ…案外気さくな方なんですね、校長先生は。」

「はっはっは。私は拘束の様な事をしたくないのでね。熱い紅茶でも淹れようじゃないか。」

「良いんですか？学校でこのような事…。」

「おっと。今日は暑かったかな？アイスティーにしようか？」

「…論点がずれてる…。」

「おいおい、私のボケに突っ込みをしてくれないと話が成立しないじゃないか。」

笑って校長先生は秘書のような人に紅茶を頼む、と指示を出す。

「こういうときは、紅茶じゃなくて貴方の頭の方を冷やしたらどうです？とか色々あるじゃないか。」

「校長にそんな突っ込みできる人いないわ！！」

「私の隣にいる人が突っ込みしてますけど」

「あ…し、失礼しましたっ」

「はっはっは！いやいや、実に面白いよ君たちの夫婦漫才は。」

「「夫婦じゃありません！！！」」

「息もぴったりだ！！はっはっはwww」

大爆笑をする校長。こんなのが校長で大丈夫だろうか。非常に笑いの壺が浅い。

「校長先生、絶好調ですね。」

「あーっはっはっはwwこれ以上笑わすでないwww腹筋が崩壊するwww」

「ダメだこいつ…早く何とかしないと…」

「…と、まぁ、お遊びはここまで。君たちには言っておかなければならない事がある。」

いきなり校長は真面目な顔になって続けた。

「先ほどの能力を与えられた人形（スキルマリオネット）はある組織から送られてきた刺客だ。

その組織名は…」

「…『ルークフェイス』」

「…え？」

「…」

ユアが口を開いた。

何故だ。

何故その名前を知っている…。

…？

いや、何故俺もその名前を聞いたことが…

「…やはり、聞いたことがあったようだな。

しかし、正確には『元の世界で』聞いたことがある。の間違いだろう。」

「…元の世界で？」

「…あぁ。君たち二人は『電子エレベーター』で人間界から来たのではないか？」

「はい。そうです。」

「…そうか。電子エレベーターはこの世界での使用を禁止されている危険な乗りものだ。

まぁ、普通なら乗ることすらできない乗り物。と言った方が早いだろう。

しかし、そのルークフェイスと言う組織が発明したのだから、持っていてもおかしくはない。

そして、そのような乗り物を作る事が出来る『サイノウ』を悪用して『ドリョク』派の人間を滅亡させようとしているのだ。」

「…ユア、お前は何故ルークフェイスと言う言葉を知っている？」

「…レオンも知っていてもおかしくないはずだよ。元の世界で嫌と言うほど報道されていたはず。」

「報道…ニュースでか？」

「覚えていなくても無理はない。…むしろ、覚えている方がおかしいんだ。」

校長は紅茶をすすって言った。

「電子エレベーターは『物体の細胞を電子レベルまでに細かくして世界を行き来する』乗りもの。

…ほら、小林先生の能力は『電子（エレクトロン）』だったと思う。それに近い能力を応用した物だ。

そしてその行き来の際に、『生き物の記憶を抹消する』という特殊な現象が起こる。」

「生き物の…記憶を…？」

「…そうだ。だから、普通は君たちは記憶喪失になって居なければならないはずなのに、記憶がある。

それは椰子岡君、君の能力のおかげだ。」

「私の…？」

「うむ。君の能力は『護（ガード）』だそうだね。似た系列だと『守（シールド）』と言う能力もあるみたいだが、君の護りは優秀みたいだ。

色々な物から身を守る事が出来る。呪いや能力、そして…悪人。

その能力を持っているだけでエレベーターの能力から護られたん

だ。
…まぁ、能力にも限界はあって、一緒にいた臥竜君の記憶までは完ぺきには守れなかったみたいだが。」
と、校長はパイプを吹いて一息ついてから言った。
「君たちも吸うかね？」
「は…って校長が生徒に趣向品勧めたらいかんでしょうよ！！！」
「冗談だよ冗談。なにせ君たちが硬い表情だからねぇ。私はそれを好まないと言ったろう？」
笑って校長は言った。
「まぁ、とすると、臥竜君は恐らく、一部の記憶を失ってここにきているはずだ。
…組織の記憶をごっそり抜かれているに違いない。必要最低限の記憶ぐらいは持っているだろう。家族構成とか…。」
「…私は覚えているんですけどね。どんな組織か。」
「だが覚えていても、無意味かもしれない。なにせ君たちのいた世界と、この世界の常識はまるっきり違うからな。」
「…俺、主人公だよな…」
大丈夫か？俺。主人公が一番情けないってどんな物語だよ。情弱物語だよ。これじゃあ。
情も弱ければ情報にも弱い。

「とりあえず、どんな組織なんです？」
俺が質問を口にすると、３人に甘い香りのするキャラメルストロベリーの紅茶が渡った。
「…彼らは『サイノウ派』と呼ばれる一団の大きな組織。我々夕陽丘高校に集まる能力者は『ドリョク派』と呼ばれる
一団の中の小さな組織だ。能力戦争はこの二つの勢力同士がぶつかり合って起こっているんだ。
しかし、サイノウ派の人間達は全員が『禁則能力（バーンスキル）』と呼ばれる能力を扱う。
人間の体や動物たちに直接悪影響を与える能力のことだ。そして、もっとも恐れられている能力をルークフェイス
のボスが所持している。しかも二つ。」
「二つも能力を持つ事なんて出来るんですか！？」
「我々ドリョク派の人間は努力次第で持つことは可能だが、法律で禁止されている。
能力を二つ持つと、必然的に二つの能力が禁則能力になってしまうからだ。
しかも、並大抵の努力では会得することは不可能。過去で持っていた人間は…アイザック・ニュートンやエジソンとか
と言った、能力開発に携わった人間が持っていたと記録がある。ドリョク派の人間の中ではな。」
校長は紅茶にミルクを注いで続けた。
「そして、サイノウ派の人間達はそのボスが使う能力によってドリ

ョク派の人間を消している。
そして君たちは『電子エレベーター』でこの世界に来たが、記憶を失っていない。
あぁ、言うのを忘れていたのだが『能力』というものは『記憶中枢』と密接な関係があってね。
本来持っている記憶が無くなると能力は無くなって『無能力者』になってしまう。
しかし。無能力者はこの世界に存在しない。『証拠隠滅によって。』」
「…な…じゃあ、こっちの世界の人間は記憶を奪われて俺たちの居た人間界に飛ばされているっていうのか！？
いや…待てよ、そのニュースどこかで…」
レオンはひたすら無い記憶の引き出しを引っ張り出す。そして、脳内の検索結果から一つのニュースを思い出した。

『怪奇！？深夜徘徊する謎の人々！！』
『…深夜徘徊？普通じゃねーの？』
俺は一人でそんな突っ込みをする。
『昨夜未明から、若い人々などが忽然として消えて行くという怪事件が発生しています。
しかし、翌日の早朝には必ず元いる場所に戻っているというなんとも不可思議な事です。

徘徊していた人に話を聞くと、全員が分からない、知らないと言っています。』

『…不思議なもんだな。記憶がねーのか。』

「ユア！！お前が始業式の日に遅刻する時に朝にかかってたニュース！！」

「えぅ！？　…んあー、朝は寝坊したから分からないけど、帰って来て見た新聞の1面に小さく載ってたよーな…」

「あぁ、それだ。もしかしたら記憶が無いその人間は…こっちの世界から電子エレベーターで来た人間！！！」

「…その通り。しかし、同じ世界線に同一人物は存在する事は出来ない…。俗に言うタイムパラドックスと言われている奴だ。
恐らくは、能力戦争の際にサイノウ派の人間にとって不利になるような強力な人材を
ドリョク派から拉致し、電子エレベーターで人間界に送る。
その結果、パラレルワールドである人間界に同じ人間が存在する事になる。
そして、早朝に戻ってきている人間は…こっちの世界で記憶を失われた人間だ。」

優雅に紅茶をすする校長先生。
そして、今までになく真面目な顔になって言う。

「…ここで最も重要な事を君たちに話したいと思うんだが…。地獄に落ちたかのような衝撃が走るかも知れん。
その覚悟は…出来るかな？場合によっては言わない方が良いだろう。」

「…ここまで来て話さないなんて無しですよ？」

「…地獄の門まで連れてきたのは貴方でしょう？行きますよ。地獄の奥底までも。ねっ、レオン？」

ユアは爽やかな笑顔で俺にそう言った。
全校生徒が見たとしたらおおよその９割９分９厘が恋に落ちるかのような笑顔だった。（ホモを除く）

しかし。

落ちたのは恋ではなく、地獄で間違いはなかった。

「では、話そう。
ルークフェイスによって無能力者にされた人間は、記憶を失って人間界に送られる。
次に、元々人間界に居た人間は証拠隠滅をするために殺される。
そして…」

もうこの時点で地球の地軸が９０度に傾いただとか赤道が地球の真横じゃなく縦になっただとかそんなレベルでは
説明もつかないような衝撃を受けたのだが、さらに校長先生は俺たちに追い討ちをかける。

「…この世界に居た君たち二人も同じ目に遭っている…。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8768t/

サイノウの果てに

2012年1月12日23時49分発行